

# 第 21 回全国さくらサミット in 津山

## 会 議 録



平成 2 5 年 4 月 7 日 ( 日 ) ・ 8 日 ( 月 )

津山国際ホテル「桜華の間」

主催 / 岡山県津山市

共催 / 美作国建国 1300 年記念事業実行委員会

# 目 次

■開会挨拶	1
■記念講演	2
■サミット全体会議	15
■大会共同宣言	47
■次期開催地代表挨拶	48

## ■ 開会挨拶

岡山県津山市 市長  
**宮地 昭範**



皆様、おはようございます。津山市長の宮地昭範でございます。

第21回「全国さくらサミットin津山」に、全国各地から津山へようこそお越しいただきました。

本サミットは、桜によるまちづくりを推進する自治体が一堂に会し、共通の課題について協議、あるいはまた情報交換を行い、連携促進を図ろうと、毎年開催をされております。

昨年、岐阜県各務原市での全国さくらサミットに初めて参加をさせていただきました。全国さくらサミットの趣旨に感銘を覚え、今回、招致させていただいたところでございます。開催に当たり、御尽力をいただきました皆様方に心より感謝を申し上げる次第でございます。

本市には、日本の桜名所100選に選ばれております、津山城、樹齢約560年を迎える尾所の桜のほか、桜にちなんで建てられた作楽神社など、桜の見どころがあふれる町でございます。

また、本市を中心とする岡山県北の10の市町村は、奈良時代より美作国と呼ばれておりまして、今年はその建国1300年という記念の年でございます。津山城を中心に、開催中のさくらまつりも、例年とはひと味違う雰囲気となっておりますので、ぜひごらんいただきたいと存じます。

今回の全国さくらサミットのテーマは「新たな桜の観光まちづくり～地域資源を活用した観光振興～」としております。皆様方の自治体の観光客誘致の促進につながる有意義な議論を交わしていただきたいと思います。

2年前の東日本大震災を機に、人と人、まちとまちの絆やつながりがますます重要視される中、今後とも桜をキーワードに自治体間の友好と親善の輪がますます広がり、深まりを見せていきますことを御期待申し上げ、甚だ簡単でございますけれども、御挨拶にかえさせていただきます次第でございます。

大変御苦勞様でございます。ありがとうございました。

## ■ 記念講演

「地域資源はこうして活かせ！～観光まちづくりの心得と実践～」

地域創造プロデューサー

二瓶 長記

ただいま御紹介いただいた二瓶でございます。

私は津山市とは大変縁が深くて、最初に津山を訪れたのはかれこれ二十数年前になります。以来、何度かこちらのほうにお伺いしまして、津山市の観光振興のお手伝いをさせていただいています。

そんなことから今回の講師要請になったのではなからうかと思っています。これからの60分の講演の中で一つでも二つでも参考になることがありましたら、お持ち帰りいただければうれしく思います。

昨晚、私は懇親パーティーのほうにも出させていただいて、皆さん方の桜に対する思い入れに感動いたし、桜によるまちづくりに御熱心に取り組んでいらっしゃる姿に改めて感心しています。

ちなみに、私自身も桜で大変苦勞している1人でございます。とはいえ、同じ「さくら」でも意味が違い、俗っぽく言えばいわゆる“ヤラセ”のことです。私の講演の後、サミットで篠田先生がコーディネーターをおやりになりますが、私もシンポジウムなどのコーディネーターをすることがあります。そのときサクラで大変苦勞します。会場から質問をいただくという段取りで、果たして段取りどおり質問者が出るか。呼び水として誰かにお願いして、一番先に発言の口火を切ってもらおう。つまりサクラを用意するわけです。そういう意味でのサクラで苦勞しているわけです。

「サクラ」の語源は、江戸時代後期にさかのぼるようです。昔は梅とか菊とか牡丹などはお金を払って見に行ったそうですが、桜だけはタダで見られたことから、“タダ観”のお客さんをサクラと言ったそうでございます。最近では桜を見るにもお金を払うところも出てきていますけれども、もともとタダだったわけです。

タダ観の桜にひっかけてサクラに仕立て上げた最初が、歌舞伎の世界でございます。つまり、タダで芝居を観る代わりに「成田屋！」とか「成駒屋！」と声をかけはやし立てながら、芝居小屋全体の雰囲気盛り上げていく。つまり、タダで観るかわりに、そういう役割を担うのがサクラだったわけです。

それが明治時代に入りますと、的屋などがサクラを使うようになりまして、お客さんの中に混じって「それ、いいね、この値段で買うよ」とか何とか言いながら、お客さんの気



持ちを盛り上げていき、その品物を売り切ってしまうというやり方をしたわけです。つまりサクラというのは、仕掛け人であり、マーケットであったということなんです。

ですから、今回ご参加いただいた皆さん方も、私のいう「サクラ」そのものかもしれませんが、仕掛け人とかマーケットなら“樹木”としての桜以外のさまざまな「さくら」という切り口を考える必要があるのではないかと。つまり、桜をキーワードとした多様な資源としての捉え方があってもよいのではないかと思うわけです。

私の講演タイトルは「地域資源はこうして活かせ！～観光まちづくりの心得と実践～」ということからもお分かりのように、私は日本全国のあちこちでまちづくりやまちおこしの指導をしています。今回は桜がテーマでございますので、なるべく桜の事例も入れながら、話を進めたいと思います。

まず、最初に申し上げたいのは、桜のことを考える前に、地域のことを考えてみようということです。ここにも書いてございますけれども、“地域は暮らしの総体である”ということです。地域社会というのは、仕事とか経済活動ばかりで成り立っているわけではなく、人々の暮らしとか、文化とか、いろんな歴史的資産も含めて成り立っているわけです。そういう意味で、地域と暮らしというものをテーマに考えてみる必要があると思います。

地域には自然がございます。桜も自然の中の1つかもしれません。もう一つは、農林漁業という生業もございます。それから、工業・商業もございます。歴史・伝統もございます。当然ながら、住まいもございます。文化・芸術もございますし、風俗（習俗）もございます。こんなものがもろもろに織り交ざって、地域があるわけです。

観光まちづくりのテーマはこういう地域をひっくるめて存在するのです。たとえ桜という切り口であっても、これらのどれとどう連携していくか、また連動させていくかを基本にしながら、地域を考えていかないと、観光まちづくりには結び付いていかないのではないかと考えているわけです。

人々が訪れたい地域の魅力要素をアンケートをもとに集約すると、第1位は、「食がおいしい」ということ。食の魅力は観光まちづくりのもっとも大きな要素です。

昨晚の懇親会では、大変おいしい開発されたご当地グルメを頂戴しました。あれを見ると、津山市もいろんな食の開発をしていることを再認識しました。「観光」と「食」というのは、切っても切れない関係にございます。食のない観光はあり得ません。固有の食文化というものをどうやって地域の中につくり出していくかが、観光客誘致のための最大の目玉でもございます。津山市は食に対しての関心が大変高い地域で、今後B級グルメをはじめ期待が持てる地域だと思います。皆さん方の地域でも、これから樹木としての桜はもとより、食についても真剣に考えていく必要があると思います。

第2位は「自然や緑が豊か」ということです。自然や緑が豊かでないと、今のお客さんはその土地を訪れてくれないということが言えると思います。

第3位、この写真は最近リニューアルした東京駅ですけれども、つまり、「魅力的な歴史建造物がある」かどうかということです。歴史と個性ある風情があるかどうかというの

が、誘客効果の大きな決め手になっているのも確かです。

第 4 位が、「魅力的な祭りやイベントがある」かどうかです。

第 5 位は、「欲しい土産や地域産品があるか」どうかということです。皆さん方の地域はどうでしょうか。桜で地域おこし、まちづくりを進めたとしても、おいしい土産品とか、地域産品が少ないならぜひ、開発に取り組んでほしいと思います。

ここでは第 5 位までしか示していませんが、この中の幾つかの取り組みが成功したということになると、地域は変わってくると思います。

次に、地域資源の捉え方と活用の視点について、お話しします。

たとえば、1本の桜の木を皆さん方は地域資源としてどんなふうに捉えているでしょうか。多分、推察するに「桜の景観を楽しむ」といったことが大半ではないでしょうか。

1本の桜の木の資源観としては、まずは「木材資源」でございます。昔、桜というのは、大変高級な家具とか、それに類する用具や家屋に使われていたそうです。桜の専門家の方にお聞きしましたところ、桜の木は固く、滑りがすごくいいのだそうです。ですから、桜は木材資源として優秀で、大変高質な材料だったそうです。

もう一つは、先ほど言いましたように、「景観資源」としての桜です。最近の桜のブームで、一番考えられているのは、景観資源としての捉え方だろうと思います。景観資源としての桜のウエートが、最近はすごく高くなっています。

でも、桜の効用はそれだけだろうか。「健康増進資源」という捉え方もあるし、生薬にも大変いいそうです。特にせき止めには大変効くそうでございます。そういう多様な観点から、我々は桜というものを見てきたでしょうか。

もう一つは、「食用資源」です。これは現在でも結構やられています。「桜餅」というのは、葉っぱを塩漬けにして、食用の土産品としても利用しています。そのほかにも祝いの時に出す「桜茶」などがありますから、食用としても大いに利用できるのではないのでしょうか。

もう一つは、地球の「温暖化防止」にも役立つだろうし、「空気清浄化」にも役立つだろう。当然ながら、「保水資源」としても役立つだろうし、「環境保全」にも役立つだろう。さらに、桜を使って新たな工芸品や芸術品ができるとかいった「文化芸術資源」にもなるだろうということです。

そういうふうに、桜というものは、全体をひっくるめて、景観資源ばかりではなくて、捉え方一つで新たな資源として活用できるのではないだろうかということです。私が現実に取り組んでいる事例については後で申し上げますけれども、必ずしも景観資源としての桜ばかりではないということです。

私は地域資源については、このように分類しております。

まず、「潜在的な自然資源」があります。これは気候的条件とか、地理的条件があります。たとえば豪雪地帯なら雪を貴重な資源として、地域活性化に役立っているところが結構あります。光も日本一の夕陽といったように結構取り組み事例があります。地理的条件とし

ては、秘境を逆手にとり売り出していくことも今日的取り組みです。秘湯を守る宿などは最近結構お客さんを集めています。こういう地域の潜在的な自然資源をうまく活用していくことも、これからの観光まちづくりには重要だろうと思います。

もう一つは、顕在的自然資源です。例えば「二次資源」としての里山などは、今、大変注目されています。野生の動植物、希少動植物、鉱物資源などもそうです。「エネルギー資源」としては、今、地熱が見直されてきています。発電はもとより地熱染などの産業にも役立っています。水資源としては、湖沼、海水、湧水みたいなものも、「自然資源」として注目されているわけです。「空間資源」としては、空気などもそうです。空気を観光資源として売り出している地域もあるのです。空気がきれいなために、夜景が大変美しい、星がきれいに見える。これを売り出しているわけです。

「人文資源」でいうと、まず「歴史資源」という考え方があります。例えば桜にしても、歴史資源という捉え方です。これからは、景観資源としての桜ばかりでなく、もっと多角的な視点で観ていく必要があると思います。当然ながら、桜には文化芸術、伝説民話、芸能といった捉え方もあります。桜を「知的資源」として捉え、地域に根付いた伝統的技術をうまく活用して、細工芸術のメッカとして観光振興に充てていくこともできるわけです。さらに、おもてなしとか人情、情報資源としての生活の知恵みたいなものに取り組んでいくところもある。桜には、こういうもろもろの取り組みが求められると思います。

「特産資源」としては、郷土料理とか加工品がございます。昨晚、開発された多様なグルメがありましたけれども、これも風土資源の1つに入るのではないのでしょうか。

「循環資源」としては間伐材、生ごみなどがあげられます。生ごみを地域資源にするという考え方は、普通考えられないですが、現実にはコンポスト処理による堆肥化などは今や珍しくない。それどころか、生ごみで観光客を呼んで、注目されているところもあります。

数日前、在日外交官の皆さん方を東京多摩地方の日の出町に連れて行きました。そこで見せたのが生ごみの最終処理場です。最終処理された灰を使って、道路の縁石とか、ブロック、さらにオブジェなど、いわゆるエコセメントを作りだしているのです。そういうリサイクル施設を見せましたところ、大変感動してくれました。アフリカの国の外交官は、今後こういうものをもっとアフリカの国々に働きかけて、ぜひ見せてあげたいということをおっしゃっていました。つまり、生ごみでさえ観光資源になるという考え方です。それは捉え方一つで産業観光にも成り得るのです。

地域資源の掘りおこしが済んだら、次に地域資源の評価をします。

まず「優」の資源を洗い出していきます。優とは重要文化財とか、世界遺産、名所旧跡等、世間に誇れる資源を言うわけです。

次に「少」の資源です。これは希少価値のあるものです。桜といっても、全国が桜の地域だらけで差別化が難しい。同じ桜を使った観光まちづくりでも、私どもの地域はこういうところはよそとは違うといった取り組みが大切です。私はよく言うのですが、このもの

が、この土地にあって初めて価値が出るもの、あるいはこういうやり方は、全国を見渡しても、ここ以外にやられていないやり方、こういうものを常に追求していくことが重要なのです。

もう一つは、「凡」の資源です。これは平凡の「凡」でございます。田園風景だとか、ため池とか、地場産業とか、女性などありきたりの資源です。こういうありきたりのものでも、取り組みの手法によっては、新たな展開に広がっていく。茨城県内では、女性だけの庭師の会社をつくったそうでございます。庭師といたら、ほとんど男の世界という概念ですが、女性のガーデニングの感性を生かした庭づくりは貴重です。すると、視察団がやって来る。そうすると、女性庭師集団が観光資源そのものになるわけです。当然ながら田園風景、棚田なども、今では観光的価値を持っているわけです。「棚田サミット」などは今や知らない者がなくらい有名になってしまった。

次に「負」の資源です。先ほど生ごみの話をしましたが、これも負の資源です。しかし、負の資源も考え方によっては、新たな展開が広がります。豪雪地帯もしかり、流木なども大変身します。高知県に黒潮町大方という地域がありまして、海岸に流木がどんどん上がってきて、掃除をするだけでも大変だった。ところが、何年か前から、考え方を変えたわけです。流木がつくり出す芸術作品、自然がつくり出すアートに視点を移したのです。「うちの町には美術館がありません。しかし、自然界がつくり出す砂浜という広大な美術館があります」。こういう訴え方で、全国発信し観光客誘致にも成功しているのです。つまり、負の資源の視点を変えただけで見事に芸術作品にしあげたのです。

次に「棄」の資源です。かつての我が国では、こんなものは必要がない、捨ててしまおうということで、どんどん廃棄されてきた経緯があります。棚田などもそうだったのです。ところが、近年、ますます脚光を浴びてきているわけです。空き家、わら細工、和蠟燭などもそうです。

先ほど東京の奥多摩の話をしましたが、奥多摩には、中曽根康弘元総理の日の出山荘という古民家があります。山荘周辺には孟宗竹がいっぱいあるものですから、管理人がひと節ずつ切って軒先に並べておいたのです。そうしたら、外国人観光客が、これを売ってくれと言うのです。1個100円いただきたいと言ったら、ほとんど売り切れてしまいました。単なる竹をひと節ずつ切っただけです。捨ててしまうようなものだったのですが、それを買って行くわけです。外国人は日本の文化、日本の資源に大変興味を持っていますから、そういうところに注目をして、ちょっと一ひねりするだけで魅力は倍増するのです。

最後は「未」の資源です。今まで発見されていなかったようなものや誰も知らなかったものです。具体的に言いますと、海洋深層水、イルカやホエールウォッチングなどです。クジラは、もともと獲って食べるものだと思っていたのに、見るだけです。それでも観光客は沢山訪れる。また、音から町をつくっていくという考え方もあります。皆さんは音をまちづくりに活かすなんて考えたことがないと思います。まさに、これは「未」の概念です。空気もそうです。こんなものは、未の資源の範疇に入れても良いと思っています。

こういう評価をしたのちに、その評価を踏まえて、次にどのように活用していくかという手順で考えていくべきだろうと思います。

まず第一点目は、「まちづくりの視点」ということで、これからの時代はエコツーリズムが主流となると思います。その地特有の自然や歴史や伝統を通じ、自らの人生に新しい光を発見し、癒し時代にふさわしいそぞろ歩きのできる旅の構築です。町の中をそぞろ歩きのできる魅力たっぷりな、そんなまちづくりをしていったらどうだろうか。エコツアーというのは、必ずしも自然ばかりではなくて、伝統的家屋、そういう町並みも含めて、そぞろ歩きができるような空間を楽しむことです。

第2点目ですが、現代は「環境の商品化」の時代だと思います。自然環境、生活環境、文化環境などの商品化というのが、大きな課題となってきています。特に、水辺の風景づくりなどはこれからの大きなテーマです。もちろん桜のまちづくりも同じだと思います。どうやって地域の中に、新たな環境をつくり出していくか。環境をテーマに個性的な境界をつくることによって、観光まちづくりが成就できるのではないだろうかと思います。

観光客は地元民が気づかないことを端的に指摘してくれます。自分のまちには観光は必要ない、というまちがありますが、それは考え方が間違っています。観光客はよそ者だからこそ、地域のすばらしさも欠陥も指摘してくれるのです。そこで初めて自分のまちの真の姿が認識できるものなのです。今日的には観光振興こそまちづくりの原点であるとも言えると思います。

第3点目は「産業観光の時代」です。皆さん方の地域で、桜を産業観光として捉えたことは多分ないだろうと思います。桜には樺細工がございませけれども、産業観光としての桜の活用などこれからの課題かも知れません。産業観光は伝統産業からハイテク産業まで、産業自体が観光的作用を担い、生産現場の見学・体験・交流みたいなものが、観光の大きな目玉となってきており、これこそが町歩きとぴたっと合うジャンルだと思います。

私は練馬区の観光振興のお手伝いをしたことがございますが、練馬区というのは、アニメーションプロダクションが多い地域です。2～3人でやっている小さな会社が大半で、ほとんど世間のスポットが当たっていません。ところが、数年前から、町歩きをさせながら、アニメーションの小さな会社をめぐっていく「町歩きツアー」を実施しています。すると、アニメーションスタッフたちにもやる気がでてきて地域全体に活気が出てきて、新しいイメージの街並みが生まれてきたのです。これは大変重要なことだと思います。このように産業観光はまちづくりに大いに貢献するこれからのツアージャンルなのです。

第4点目は「住民ホスピタリティー」です。いくら桜の木をたくさん植えても、住民のホスピタリティーが欠如していたのでは、お客さんは逃げて行ってしまいます。観光・交流の振興策にとって、人材育成というのは、大変重要です。ぜひ人材育成に取り組んでもらえればと思います。特にコンシェルジュといいますか、世話人、案内人、こういう方たちの役割は大きなものだけにその養成が求められています。

東村山市というのが、同じ東京都内にあり、私はその観光指導もしています。その指

導の中の1つの目玉が「キッズ観光ガイド」、つまり子供の観光ガイドさんの養成です。要するに小学生が町を案内してくれるのです。皆さん方の地域でそうした取り組みをしているでしょうか。おそらく、やっていないだろうと思います。東村山市で最初にその話をしましたら、物すごい抵抗に遭いました。子供たちにそんなことをさせるのか、とんでもないというわけです。

ところが地元小学校の校長先生OBの方が熱心で、地域を愛する子供たちを育てるには、地域の歴史を覚えさせる。外来者を案内することによって、自分たちが地域を勉強するようになる。だから、地域が好きになってくる。学校教育とは別に子供会組織を使って、塾長となってキッズガイドを養成しています。しかも、地元商工会がそれを支援しているのです。今年で4年目に入り、ガイド内容もかなり質の高いものになってきています。塾長は子供たちにイラストマップや紙芝居を書かせて観光客を案内し、あの本堂の中は、実はこんなふうになっている、昔はこうだったなんてことを、マップや紙芝居を見せながら説明していくわけです。案内するキッズたちはみな生き生きとしています。このように人材育成にまで踏み込んでいけば、桜を活用した観光まちづくりであっても、その成果は大きな広がりとなって波及されると思います。ぜひそういった取り組みを考えていくべきでしょう。

もう一つは、一地域だけが一生懸命になるのではなくて、周辺地域と連携していくことも大変重要なのではないかと思います。関連産業とか、地産地消とか、広域連携等によって、地域の観光的魅力をさらに高めていくということです。

結論的に言いますと、地域資源の発掘というものを有効活用してほしいと思います。先ほど言いましたように、まず、地域内のいろんなものを洗い出してみてください。それが桜と直接に結び付かなくとも大きな広がりを持った、本当の意味でのまちづくりになっていくような気がするのです。そういうことで、ぜひ地域資源の観光的、文化的、産業的有効活用への取り組みを考えてほしいと思います。

ではここで、資源を観光活用する場合の留意点をいくつか挙げてみましょう。

1つは、「個性的な活用の心がけと躍動感の発信」ということです。まず、よそと似たようなことをやったのでは、だめだと思います。日本全国、桜の地域だらけです。よそと同じことをやっていたのでは、今までやられていたところに勝てっこない。そうではなくて、よそと似た地域資源活動でも、切り口を変えるということです。切り口を変えることによって、桜の見方も変わってきますし、そこに来るとお客さんの思いも変わってきます。ここがポイントです。そして、常に地域が躍動している、次に向かって何かに取り組んでいる躍動感を発信していくようになれば良いと思います。これが最初の留意点です。

もう一つは、基本的に多くの観光客を動員したい場合には、「余り深堀りしない」ということです。深堀りをしますと、それを研究しているマニアックな人間だとか、専門家的な人にとっては、興味がどんどん高まってきますが、それと反比例して、一般のお客さんは敬遠するようになってきます。ですから、資源のどの視点に立って、桜のまちづくり、

つまり、地域資源を活用したまちづくりを進めていくかということです。沢山観光客を入れたい場合と、ひと握りの方でいい、本当にこれを愛する人たちだけに訴えかければいいのかという場合とでは、ポイントの置き方が違うと思います。その辺を見極める必要があるだろうと思います。

一般の観光客というのは、アカデミックにそのものを追及するために、その土地を訪れるわけではありません。大体、空気を楽しむためなのです。

1つは、「文化的雰囲気に関心したい」ということがあります。今『源氏物語』とか『万葉集』だとか、そういうカルチャーセンターに行く奥さん方が結構多いのですが、勉強家だと思って、その方に聞いてみました。そうしたら、私は勉強しに行っているわけではない。文化的で知的な雰囲気の中に浸りながら、楽しんでいると言うわけです。現代の一般的な観光客の方も、そういう感覚ではないでしょうか。したがってどこにターゲットを置くかということであって、ターゲットの置きどころによって違ってくることをぜひ心得てほしいと思います。

もう一つは、「ライブ感覚を共有したい」ということです。私は沖縄に何度か行っていますが、沖縄の復元された首里城にはお客さんがたくさんいます。首里城のすぐ近くに琉球博物館があります。沖縄を知るためだったら、琉球博物館に行けば沖縄を深く理解できるし、展示内容も素晴らしいです。首里城復元の原型ともなっているミニチュアも博物館にあります。沖縄を知るには首里城より博物館のほうが最適です。ところが、観光客は博物館にはほとんど行かない。すぐ近くの首里城には観光客でごった返しています。端的に言うと、首里城というのは、復元されて20年あまりですが、そちらのほうが圧倒的に人気があるのです。なぜかといいますと、一般のお客さんは勉強をしに沖縄に行っているわけではないからです。観光客はその土地に行って、時代や風土の雰囲気の中に浸りたい。ライブ感覚を楽しみたいと思っているわけです。

桜によるまちづくりはどのようなのだろうか。ただ桜の木を植えたらいいのではなくて、桜にまつわるいろんなバックグラウンドに焦点を当てることによって、新たなお客さんを獲得できるのではないかと、まちづくりに結び付くのではないかと思うわけです。

地域観光とは、地域が世間に誇りたい、地域のもつ光を多くの人々に見てもらいたいと願うことです。観光とは、地域の光を観ることなのです。観光なんかどうでもいいという地域も結構ありますけれども、私はそんな地域でよく言うのですが、「この地域には光るものが何もないのですね、また、土地の人もそういう光を見たいとも思わないし、光らせようという気もないのですね」と。観光とは、地域の持っている光、つまり地域住民が誇りとする光を見つけたり、創り出していくことなのです。そして、地域資源をブラッシュアップすることによって、さらにピカピカと光る誇り高きものになっていく。自分たちがその光を見ると同時に、よその方にもこの光を見てもらいたい。そういう思いが観光の基本なのです。

観光という字は「光を観る」と書きます。単なる「光を見る」だったら「観」ではなく

て「見」です。観光ではなく見光でもいいわけです。ところが「見」と「観」には違いがある。「観」は心を込めて、そのものを見つめるということです。ただ見せればよいということではなくて、自分たちも心を込めて磨き上げて、人々に観てもらおう。こういう考え方で取り組んでいく必要があるのではないかと。

事例を 2, 3 申し上げたいと思います。

「仁淀川紙のこいのぼり」は、高知県のいの町のイベントです。仁淀川という川は四万十川に匹敵するぐらい、すばらしい川です。また、いの町は和紙の産地でもあります。全国的にも和紙の産地はどんどん廃れていって、和紙では生活が成り立たない状況です。毎年 5 月になりますと、こいのぼりがどこの町でも上げられます。この町もこいのぼりを上げようとなったわけです。ところが、実行メンバーの中の若い人が、「こいのぼりというのは、きまって空を泳いでいる。なぜ空を泳ぐのか。本当のこいのぼりは川の中を泳ぐことではないか」と質問をしたわけです。ところが、誰も答えられない。そんなことを考えたことがないからです。こいのぼりというのは、ポールを立てて、空を泳ぐものだとばかり思っていましたから、水の中を泳ぐといった発想はない。誰しも「えっ」となったわけです。そうだ、よそにあってはさほど価値がなくても、この土地にあって初めて価値が出てくる、この土地にあることが大きな意味を持つてくるというやり方だったら仁淀川を使ってこいのぼりをするのではないかと。さらに、うちの町は土佐和紙の産地だ。和紙でつくった鯉を仁淀川で流してみたらどうだろうかとなって、始めたのが「仁淀川紙のこいのぼり」というイベントです。

和紙と清流という地域固有の資源を生かして、いまや、全国に情報発信をし、土佐和紙の復活に大きく貢献しているわけです。しかも、各地の幼稚園・保育所の子供たちを集めて、体育館の中で、みんなで力を合せて和紙の鯉をつくらせ、それを仁淀川で流すといった参加体験型のイベントで地域全体が活気づいているのです。

もう一つは、「キツネの夜祭り」というイベントです。新潟県柏崎市高柳地区のキツネ伝説をベースに創作して、2.5キロの山道を、観光客参加によってキツネの行列を実施して、地域産業の振興と民宿の経済振興を図る、旧高柳町を挙げての夜祭りイベントです。高柳地区は全くの山間地で、過疎地帯もよいところです。真ん中の森があるところが、神社の境内で消えてなくなるような限界集落一步手前の地域です。この集落と 3カ所がイベント会場になっており、キツネの伝説に基づいて、3カ所連動で新たにつくり出したのが、このお祭りです。

地元の中学生在がキツネの面をかぶって、喜んで参加しています。それから、地元は和紙の産地でもあることから、和紙でつくった灯籠、こんなものもイベント参加者には有料で貸し出しています。夜中、2.5キロの暗闇の山道をしばらく歩きます。麓の山里に下りると、そこがまたイベント会場になっていて、そこでは観客参加のお餅つきや、狐踊りの乱舞や村の工芸展や露天市などをやっています。今では、高柳地区は「じょんのびの里」として、柏崎市の誇る地域づくりの代表格として注目されています。

このイベントでは、全国にボランティアスタッフ募集を働きかけましたら、大学生が全国各地から集まって、スタッフとして懸命に働いています。

次はご当地津山市の「津山城築城400年祭」です。これは8～9年前に、私が総合指導した事業です。津山城にとって有名なのはなんとといっても城郭を支える石垣の見事さで全国に誇ります。

そこで、築城400年祭には石垣にまつわる新たな展開になるような方法はないだろうかと思ったわけです。いろいろ調べている間に、市内には石山があり、400年前に忘れ去られた石があるのに気付きました。これは洪水によって、石山の沢に洗い出されたまま残されていたのです。よし、これを築城400年祭の記念行事としてお城に届けよう。しかも、400年前そっくりそのまま、その当時のやり方で届けようということになった。

さらに、日本一どでかい大石を運ぼうということで日本一の大石曳きをやったわけです。1個の石が20トンです。1週間前にリハーサルをしましたところが、なんとびくともしません。やむなく16トンに削り落としたが、それでも動かない。リハーサル翌日の新聞に「幾ら頑張ってもびくともしない大石、一週間後の祭り本番が不安」といった内容の記事が出て、紙上で曳き手の募集までしたという有様。いよいよ祭り本番の日、なんと250人の曳き手が集まった。

動くか、動かないかわからない状態で、当日を迎えた。かけ声とともに、400年前と同じやり方で250人が綱を曳く。地面との摩擦による噴煙があがり、遂に大石が動き始めた。「やった！」大石が動いたときのあの感動は二度と体験できないものであった。沿道の観衆からも「うお！」という歓声とともに割れんばかりの大拍手となった。

大石曳きと同時に、400年前に忘れ去られた石も津山城内に運び込まれました。この様子は、当時の(社)日本観光協会刊の月刊「観光」のグラビアを飾りました。「築城400年祭」で城に届けられた『忘れ去られた石』は、以来、津山城内に展示されているのでいつでも見ることができます。

このように、山から切り出された忘れ去られた城郭石が400年祭という記念行事で用いた単なる石で終わってしまうのではなく、400年後の現代に、市民同士の連帯によって城に届けられたという物語性を創りだすだけでなく、その後の津山のまちづくりに結び付けてきた市民の連帯とバイタリティを引き出したという点でも大きな功績を残したと言えます。

もう一つは、現在、私が取り組み中の事業をご紹介します。今年はNHK大河ドラマ「八重の桜」の放送の年でございます。この大河ドラマは、福島県会津若松が中心舞台でございます。その会津地方に隣接した西白河郡西郷村という地域があります。ここでも『八重の桜』に引っかけて、何か観光交流事業ができないかとなりました。地元の小学校の校庭の裏山に「戊辰桜」と呼ばれる1本の桜の木がありますが、地元の方は、この桜がどういう意味を持っているかということ、ほとんど関心がなく、きれいな桜の木が1本春になると見事に咲き誇るといった程度にしか思っていない。その脇には小さな碑が立っています。戊辰戦争で負傷した会津の兵隊地元民の手厚い介抱によって救済されたことを感謝し

て、会津兵が村人たちに感謝を込めて植えた 1 本の桜の木が、見事な桜に成長して今日を迎えているということが、この碑によってわかってきました。この桜の木はなんと 150 年の歴史を刻んでいるのです。

地元の郷土史家とともに、何とか桜にまつわる歴史をもっと深く掘り起こしてみようということになって、歴史の掘り起しと観光まちづくりを私に依頼してきたのです。

しばらくすると、いろんなことがわかってきました。桜を単なる景観資源という捉え方であったものが歴史資源という捉え方をすることによって、この桜にまつわる大変なエピソードがクローズアップされてきたのです。

それは何かといいますと、幕末期、江戸の千葉周作の道場に森要蔵という剣豪がいました。森要蔵というのは、坂本龍馬の師匠に当たる方です。この方は熊本藩士ですが、ゆえあって脱藩して、飯野藩という、今の千葉県富津市の藩に、剣術指南として召し抱えられました。飯野藩というのは、信州高遠藩の分家であります。高遠藩というのは、保科正之が藩主でして、その後会津に国替えとなったことから会津が本家で分家が飯野藩で、森要蔵は分家の家臣になったわけです。そして、戊辰戦争、大河ドラマ『八重の桜』は今ちょうど戊辰戦争が始まる直前の慌ただしい世情のシーンに入ったところです。森要蔵は藩に迷惑がかからぬように、飯野藩を脱藩して会津軍の助っ人として息子の虎尾とともに参戦し、壮絶な戦いの中で惨殺されるという悲劇です。その舞台がここ西郷村であったということが一本の桜の歴史を辿ることで分かってきたのです。

地元民の大半は今もって、そのいきさつは分からない。郷土史家は、こうしたことを知ることによって郷土愛も生まれるし観光まちづくりにも役立つのではないか。あまりにも無関心な村民を悔やみ、これを何とか語り部用の脚本にしてほしいと私に頼んできたのです。

私は脚本として書き上げるためにさらに調べていきましたら、なんと森要蔵という幕末剣豪のお孫さんが、出版社の講談社を創設した野間清治氏であったことが分かってきたのです。

このような経緯から鑑みると、1 本の桜の木でしかなかったものが、今度は講談社とジョイントして、地域活性化のための新たな展開ができないだろうかと思いが発展していくわけです。このように、桜の木を構成する要素をいろんな観点から調べ上げていくと、単なる景観としての桜の木だけでなく、新たに何かが見えてくるものです。

地元の語り部養成ばかりでなく、今後講談協会とタイアップしまして、国立演芸場あたりでこれをやっていただきたいと、今、働きかけをやっています。そうすることによって、桜を媒体とした新たな展望が見えてくるのではないのでしょうか。ぜひそういう考え方で、桜を考えて見たら意外なところに活性化の方策も見つかるかも知れません。

ところで多摩地方の日の出町には、実は今でも森林産業が根付いています。皆さんも御存じだと思いますが、数年前に評判となった『おくりびと』という映画がありました。その映画での最大のツールが棺桶です。全国の棺桶の 70% を生産しているのが、日の出町です。卒塔婆の 60% を生産しているのも日の出町です。

日の出町の業者は石原裕次郎さんの棺桶も、美空ひばりさんの棺桶も作ったそうです。でも、棺桶や卒塔婆産業は必ずしも未来志向がもてる産業ではない。

しかし、こうした伝統的技術を利用して、何か未来志向の産業ができないだろうかと考えて目をつけたのが桜の木だったわけです。桜の木のチップは、いぶしますと、良い香りがします。地元には牛乳工場もあり、そことタイアップして、桜チップによる燻製チーズを作り多摩特産として売り出しましたところ、これが今爆発的に売れているのです。桜チップの燻製チーズを求めて遠方から訪れ、地元の温泉に入り1日楽しんで帰っていく。これこそがまさに観光資源です。同じ桜の利活用というコンセプトでもそれまで継承してきた技術をうまく活用することによって、新たな展望が開けてくることもあるのです。当然ながら棺桶や卒塔婆を作っているより、こちらのほうがもうかります。こうした事業の成功により、地域の人々ならず外来者にも波及効果を及ぼし、現在、都心からの移住者による産業おこしなども活発化しています。

私がよく言いますのは、真の観光振興は行政主導型ではなく、民間主導型であるべきであると。行政主導によって観光振興が成功を取めたという話は、少なくとも私の耳には入ってきていません。民間が頑張ることによって、それを行政が支援していく。こういうやり方をやるべきだろうと思います。私は桜のまちづくりも同じだと思っています。

ここでいくつかの観光手法を申し述べたいと思います。1つは、鑑賞型手法です。お客さんが見たり、聞いたりする喜びです。満開の桜を楽しむというのは、まさに鑑賞型手法のひとつです。

しかし今日、鑑賞ばかりでは、お客さんは満足しません。体験型手法の導入は今日的な意味では大きなポイントです。つまり、実感する喜びということです。

次に表現型手法です。来たお客さんに何かを表現をさせてみる。例えば何かをつくらせて、これを展示会に出品させるとか、時代まつりなら甲冑姿になって町を練り歩いたりパフォーマンスをしてみたりといった喜びを満足させる手法です。

次は情報型手法です。桜を見に来た人が、きれい、よかったと帰っていくだけではなく、ここへ来て新たな情報をつかんで帰れるような新たな情報がつくりだせたらよい。

さらに、協働型手法です。これは仲間づくりの喜びです。例えば観光イベントに参加した者同士が交流し合い、ふるさとに帰った後も全国に仲間ができる、そうした意味でも当該地ファンによる組織化を図ることは重要です。

最後に申し上げたいのは、まちづくりには地域リーダーが必要であるということです。地域リーダーの条件にはいくつかありますが、特に強調したいのは、みんなを引っ張っていくのではなく、後押しができる人間ということです。為政者も含めて地域リーダーというのは、ぐいぐい引っ張っていく方が適任者だと思うでしょうけれども、地域づくりに関しては、私は違うと思っています。地域みんなを引っ張っていくのではなく、後ろに下がってみんなが喜んで行動が起こせるように後押しをしてあげる。そして、遅れて関わった人たちを前面に押し出していく。そういうタイプの人地域リーダーにはふさわしいと

思います。地域リーダーがスターになってはだめだと思います。

それは過去の事例が証明しています。地域おこしが成功して、行政マンがマスコミの話題になってスター的扱いを受けると同時にそうした振る舞いをするようになる。そうした行政マンが地域に足を引っ張られて、駄目になってしまった人をたくさん知っています。しつこいようですが、仕掛け人や地域リーダーがスターになってはいけないのです。スターになれるのは、あくまでも汗を流すひたむきな地域住民です。私も地域づくりの指導者としての仕事をしておりますけれども、私は自分がスターになってはいけないと、常に自分に言い聞かせているつもりです。ひたむきに取り組む地域住民が一步前進したら、自分は一步退く、そんなスタンスで取り組む地域リーダーこそ本当の地域リーダーだと思います。皆さんも、そんなスタンスで観光まちづくりに取り組んでいただければ講演者としてうれしく思います。

ちょうど時間となりました。ご清聴ありがとうございました。

## ■ サミット全体会議

### 「新たな桜の観光まちづくり～地域資源を活用した観光振興～」

○篠田コーディネーター 私は、今朝ほど7時半、ちょうど城山が開門すると同時に登ってきました。本当にすばらしい城で、先ほどの二瓶先生のお話の中に、石垣がすばらしいという話がありました。本当にすばらしい石垣でした。天守閣のところまで行ってまいりました。昨日の夜、ホテルから夜桜も大変きれいだったんですけども、今日のすばらしいお天気のもとで見た桜は、印象に残っております。



それでは、早速さくらサミットに入らせてもらいます。

今回のさくらサミットは、21回目です。昨年、20回目を岐阜県の各務原市で行ったわけでありすけれども、そのときに、吉野町の山本さんという課長から、皆さんに提案がありました。3.11の津波や原発の関係で、見事な桜を失ったり、見るできない状況にある。何とかさくらサミットのメンバー、今、24団体が加盟しているわけでありすけれども、みんなの力で福島に桜を送ろうではないかという御提案がありました。皆さん、当然ながら、賛成でございました。

その後の経過を聞きますと、24団体全団体から吉野町さんに桜が集められまして、吉野町から猪苗代町にプレゼントされて、植えられたということでございます。原発で大変苦しい思いをしている皆さん方の目を、そのうち、和ませていってこれるのではないかと思います。

その桜の中には、先ほども出ていましたけれども、荘川桜という桜の実生のものが送られています。荘川桜というのは、水力発電の犠牲になって、湖底に沈む運命にあったんです。それを引き上げまして、今、見事に大きな桜が2本立っておりますけれども、言うならば、生き延びた、生き続けた桜の象徴が荘川桜だと思います。その桜が、原発で苦しんでいる福島の人たちに送られたということは、皆さん、ぜひとも元気で生き延びてくださいというメッセージだと思います。

このさくらサミットは、そういうこともやらせてもらっているということで、御報告を申しました。

さくらサミットの第1回は、今から25年前、四半世紀前、昭和63年にスタートいたしました。25年という、かなりの歴史を経ているわけです。途中、開催ができなかったこともありますけれども、25年間連続して開催されました。自治体が絡んだサミットというの

は、たくさんありますけれども、このように長く続いているのはかなり珍しい例だろうと思います。

ある首長さんが言っていたらっしゃいましたが、いろんなサミットに出ているんだけれども、さくらサミットだけは、絶対に絶やしたくない。ほかのサミットはサボっても、これだけは俺が出るとか、そういう大変な熱意を持っていらっしゃいました。そういう熱意のあらわれが、25年間の裏にあるかと思います。

第1回は、島根県の本次町というところで開催されたんです。現在は雲南市になっておりまして、今日も御出席でございますけれども、本次町という中国地方の小さな町で開催されたんです。一地方都市で、全国のサミットを呼びかけるというのは、今はあるかもしれませんが、当時、そういう例は少なかったと思います。

どうしてそういうことができたのかということなんですけれども、それはそれなりに時代背景がございます。皆さん方、四全総という言葉覚えていらっしゃいますでしょうか。第四次全国総合開発計画です。これは昭和62年6月に国のほうで策定されたわけです。日本列島というのは、自然条件によって、有利なところ、不利なところがあるわけです。「国土の均衡ある発展」を図っていこうというのが、全総計画の根底にあります。

そのときには、交流ネットワーク構想というものが、四全総の目玉だったんです。地方が定住人口をふやすというのは無理だ。どうしたらいいか。交流をすることによって地域を活性化して、交流人口をふやしていこうではないか。そのためのネットワーク、主に道路ということになりますが、そういうものを整備していこうではないかというのが、交流ネットワーク構想の目玉の考え方だったんです。

交流人口という言葉が、当時、我々の耳に入るようになりました。本次町さんは、そういうことで、交流人口をぜひともふやそうではないかということで、さくらサミットを呼びかけられたんだろうと思います。

先ほど申しましたように、現在、24団体になっています。

ついでながら触れますと、第1回から21回の今回まで、欠かさず、連続出席は吉野町さんなんです。すばらしいです。たった1町村だけです。1回だけ欠席されたという、ちょっと惜しかったところは、角館町、現在の仙北市さんです。そういうことでございます。

さくらサミットに加盟する団体をふやしていきたいという声がございます。最近、6団体ぐらいふえていますけれども、昨日の懇親会の場でも、100選に選ばれている団体はみんな加盟するようにしようという話がありました。どういう形で呼びかけるかは、考えるとしたしまして、そういうふうに参加自治体がふえればいいと思っております。

それでは、全体会議に入らせてもらいます。

今日は、お帰りの方の電車の時刻が決まっているものですから、絶対にぴしっと終わらなければいけないという、大使命を抱えておりまして、もしおくれたら、全て私の責任になりますので、御協力を賜りたいと思います。12時45分には、私の責任を終えたいと考えております。

進め方でございますけれども、今回のテーマは、先ほども出ていましたけれども「新たな桜の観光まちづくり～地域資源を活用した観光振興～」でございます。このテーマに沿いまして、各自治体から3分以内で事例発表をしていただくこととなります。

首長さん方は、しゃべるのが好きでしようがない方ばかりでありまして、先ほども10分ぐらいくれますかなんて、とんでもないことを言う首長さんがいましたが、ここは冷たく、3分の少し前にチンを鳴らします。3分ジャストになったら、もう一遍チンを鳴らしますので、その方はそこで口を開けておっても、ストップしてください。よろしく願います。

それを終えた段階で、フリーディスカッションに入るという仕掛けになりますので、ぜひとも御協力をお願いしたいと思います。

それでは、早速、事例発表に移りますが、例年のごとく、北のほうから順にお願いしたいと思いますので、新ひだか町さん、どうぞよろしくお願いします。

**○富田副町長（北海道新ひだか町）** 3分以内でということでございます。北海道新ひだか町でございます。

北海道はひし形のような形になっておりますが、上のほうが最北端、稚内市の宗谷岬、下のほうは襟裳岬となっております、襟裳岬から西、札幌のほうに向かいまして、約80キロ地点に新ひだか町の市街地がございます。

そこから約8キロメートルほど山のほうに入りまして、二十間道路の桜並木があります。二十間道路桜並木は、道路幅が二十間、一間が1メートル80ですから、36メートルの幅で、全長7キロメートル、直線で続けております。

昭和39年から桜祭りを開催しておりまして、今年は50回目という節目の年になります。開花時期は、平年並みですと、5月上旬から中旬ぐらいということで、今年も5月5日から12日まで、桜祭りを予定しております。

現在、桜の保存について、3点ほど悩みを持っております。

現存の桜は、大正5年から3年ほどかけて植えられた桜でございます、ほぼ100年経っているということで、かなり老木化しておりまして、風等々による倒木なども出てきております。

それから、去年は害虫による葉の被害等も出ております。通常ですと、薬剤散布をすればいいんですが、二十間道路桜並木は、サラブレットを育てている牧場群のど真ん中を直線で走っているものですから、薬剤が馬に影響を与えるということです。私もかつての経験で、薬剤散布で馬が体調を崩しまして、大変な賠償をしたこともございます。そういうことで、どのようにして、害虫駆除をするのかということが、2点目でございます。

3点目は、補植等も行っているんですが、北海道はエゾシカが大変ふえておりまして、葉や枝を食べてしまう。このようなことで、補植にも苦慮しております。

以上のような3点の課題を抱えておりまして、貴重な桜でございますので、今後いかにして保存していくか、非常に悩んでいるところでございまして、何らかの手当を進めてい

かなければならないと思っております。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

1 回目のチンでやめていただきましたが、2 回目のチンが鳴ったところでやめてもらえば結構でございます。

北からと申し上げましたけれども、一番最初は津山市さんからの発表だということをお忘れておりました。そこで、津山市さんにやっていただいて、それから仙北市さんになります。すみません。よろしくお願いします。

○宮地市長（岡山県津山市） 皆さん、大変御苦勞様でございます。

それでは、開催地津山市から発表させていただきたいと思えます。

津山市でございますけれども、桜と歴史遺産、文化の町でございます。その中でも、津山城（鶴山公園）は、岡山県内唯一の日本の桜名所100選に選ばれておりまして、市の中心に位置する津山のシンボルでございます。

また、桜は市の花に定められておりまして、市民を初め多くの観光客の方に、津山市の桜を楽しんでいただいております。

ただ、桜の花は、開花の時期が非常に短いということでございますので、津山を訪れる観光客数の大半は、春のさくらまつりの時期に集中をいたしております。桜の城下町のイメージの発信と、通年的な観光集客が大きな課題でございます。



また、桜をイメージするオリジナル商品が少ないことから、津山オードパルファム（津山の桜の香り）を発売いたしました。この香水の開発につきましては、津山さくらまつりの期間中、津山城の来場者にサンプルを用いて、アンケートを実施し、人気の高い香りを津山市観光協会にて商品化していただいたところでございます。長い間、津山城の桜の香りを楽しめると好評で

あるとともに、パッケージにデザインされた津山城の石垣と桜の花びらも注目されておるところでございます。

一方で、今年から津山城を中心とする津山さくらまつりを、市内の4つの観光協会の組織編成を機に、推定樹齢560年を迎えます尾所の桜や、標高530メートルに位置しておりますウッドパーク声ヶ嶋の桜を一体化させまして、新しいさくらまつりとして開催し、盛り上げておるところでございます。

そして、津山城では、平成10年に定めました史跡津山城跡保存整備計画で、ここ数年間にわたり、かなりの雑木処理を行ってきておるところでございます。そこには2010年に設立をされましたさくら基金によりまして、現在までに計3回の植樹が行われておるところでございます。

チンが2回鳴ってしまいました。それでは、これで終わりますので、どうぞよろしくお願ひします。

○篠田コーディネーター 笑ってはいかぬわけでありませうけれども、こういうことがございますので、同じような過ちを犯されませうように、仙北市さん、よろしくお願ひします。

○中村文化財課参事（秋田県仙北市） おはようございます。

仙北市角館地区は、国指定名勝の桧木内川堤のソメイヨシノと、国指定の天然記念物であります枝垂桜、伝統工芸品の樺細工がございます。今日は、桜でつくった名刺入れを持ってきていますけれども、こういうものを桜の中でやっているところでございます。

昨年の桜祭り期間中は、17日間で122万人の観光客に来ていただきました。震災前には156万という史上最高の数字でしたけれども、若干震災の影響があつて、なかなか戻ってきていないのが現状であります。

桜を大事にする取り組みといたしましては、観光客に桜の歴史等を教える桜の町の案内人や、肥料を施す体験活動などを、市内の小中学生を対象に毎年行っているところでございます。

新たな取り組みといたしましては、枝垂桜は、例年であれば、9月末ごろには落葉します。これは斑点病や穿孔褐斑病などを患っているためでありまして、本来の姿ではないということで、今回は花が終わった5月ぐらいから、いわゆる普通の殺菌剤を散布しました。2～3週間に一度、2日間かけて、9月まで5回実施しました。その結果、10月に入ってから葉が残りまして、紅葉が鑑賞できるようになりまして、これは新たな取り組みだと思っております。

もう一つとしましては、ソメイヨシノは、天皇陛下の誕生を記念して植えましたので、今年で80年になります。寿命は50～60年ということで、大変なんですけれども、毎年、黒坂ドクターのほうで肥料をやったり、管理してもらったり、土壌改良などをしてもらい、樹勢の維持に努めているところでございます。

また、あわせて、萌芽更新という言葉が適当がどうか分かりませうけれども、そういう感じで、植えかえをせずに、桜を守っていくという取り組みをしております。

なお、今年4月20日から5月5日まで桜祭りを行います。まだ雪がたくさん残っていますので、4月の後半に、皆さん、角館町に来てください。

どうもありがとうございました。

○篠田コーディネーター ありがとうございました。

引き続きまして、日立市さん、よろしくお願ひします。

○小川副市長（茨城県日立市） 日立市副市長の小川でございます。

日立市には企業がたくさん立地しておりまして、日本鋳業や日立製作所などの企業城下町でございますので、企業がくしゃみをしますと、行政は風邪を引くという大きな特徴を持っているところでございます。

日立市では、かみね公園と平和通りというところが、日本の桜名所100選に選定されまし

て、毎年4月上旬になりますと、催し物を行っているところでございますが、今年は4月13日、14日の2日間がメインのお祭りでございますけれども、桜が早く咲き過ぎて、葉桜祭りとなりそうな感じでございます。

桜祭りでは、ユネスコ無形文化遺産にも認定されております、日立風流物という山車を一般公開するほかに、特徴といたしましては、さくらロードレースというマラソン大会がございます。年々ふえておまして、今年は1万7,000人の方々が参加するというところで、地元泊まる、そして、食べ物を食べるという、経済効果が大きいという特徴がございます。

日立の桜でございますけれども、先ほど申し上げましたように、日立市は企業城下町でございます。もともと日立鉱山で日本鉱業という会社が、銅の発掘・精錬をいたしまして、その過程で煙害が発生したことから、その対策ということで、荒廃した山々に260万本の大島桜を植林したということが原点となっております。そこから順々に、市街地のほうに桜が多くなってきたという過程を通っているわけでございます。

日立鉱山の煙害克服への取り組みは、環境保全や企業の地域貢献の先進事例として、ほかに誇れるものでありまして、作家の新田次郎さんによりまして『ある町の高い煙突』という小説にもなっているところでございます。

そういうことでございまして、歴史的な過程を経た桜につきましては、本市の重要な財産であると強く認識をいたしております。今後これをどのように活用していくかということが、大きな課題でございますけれども、産業発展とかかわりの大きい桜を、これからも大事にしながら、年中を通じた交流人口の拡大につながればいいと思っております。

4月の第2週の土日に桜祭りを開催いたしておりますので、日立のほうにお越しただければ、大変ありがたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

それでは、新しく加入されました、豊島区さん、よろしくお願ひします。

○高野区長（東京都豊島区） 皆さん、こんにちは。新加入をさせていただきました、ソメイヨシノ発祥の地、東京都豊島区から参りました。

先ほども御紹介がありましたけれども、豊島区は23区の西北部に位置いたしまして、人口が約27万人、面積は本当に小さい面積です。13キロ平方メートルで、日本一の人口密度の、高密都市でございます。

御存じのとおり、サンシャインシティを中心に、多くの来街者が集まる池袋は、1日乗降客が250万人を超え、新宿に次ぐターミナル駅となっております。東京芸術劇場等々の多くの劇場や、立教大学、学習院を初めとして、豊島区には6つの大学がございます。著名な文化人が活躍した池袋モンパルナスなど、文化と品格を誇れる、価値あるまちとしての魅力にあふれております。

積極的な文化行政が評価されまして、平成20年度には、文化庁長官表彰を受賞し、文化

都市として着実に歩みを進めてまいりました。

区内には、手塚治虫、石森章太郎、赤塚不二夫等々を生み出したトキワ荘があり、近年漫画・アニメ文化の発祥の地としても、その魅力を発信しております。

また、区制80周年に当たる平成24年には、WHOセーフコミュニティの国際認証を全国で5番目に取得するなど、安全・安心な文化都市豊島を目指しております。

次の画面ですが、全国に広がっておりますソメイヨシノというものは、大島桜と江戸彼岸の交配種と言われ、江戸末期から明治期に、現在の豊島区の駒込の植木屋さんが、吉野桜の名で全国に売り出して、後にソメイヨシノと名づけたと言われているものであります。

この写真は、駒込小学校の校庭に植樹されたものでございまして、豊島区としては、これを駒桜と命名して、これを開花宣言の基準にしているわけであります。

次に染井吉野の里公園というものがございまして、ここにはソメイヨシノの苗床をつくりまして、全国にソメイヨシノを発信していこうというので、先ほども御紹介がございましたけれども、福島県の猪苗代に昨年10月に植樹してまいりました。

駒込地区では、地域全体がメンバーのソメイヨシノ桜の里協議会や地元の商店街、町会が桜を活用した活動を行っておりまして、さくらフォトコンテスト、あるいは桜マップの作成、ソメイヨシノ桜の観光大使等々、発祥の地のPR活動を行っております。

写真は、駒込小学校から染井吉野桜の里公園と続く道で、桜のトンネルになっております。

終わります。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

それでは、北区さん、お願いします。

○雲出地域振興部副参事（東京都北区） おはようございます。東京都の北区から参りました、観光振興担当をしております、雲出と申します。

今、スクリーンに映し出されているのは、北区で最も有名な桜の名所、飛鳥山公園で、場所はJR王子駅を出てすぐでございます。ここは江戸の8代将軍吉宗が、庶民の行楽地にするため、今から約280年前、1,270本の桜を植えたことから始まります。当時、桜の名所での宴会はタブーとされていたそうですが、吉宗が飛鳥山の地でお酒を飲んだり、仮装をしたりするのを許したことから、庶民にとってはかなり好評で、花見の名所となったそうです。江戸から町の形は大分変わりましたが、飛鳥山の桜は今も生き生きと残り、庶民の一大行楽地として楽しまれてございます。

続いて、桜をテーマとしました北区のイベントを紹介させていただきたいと思っております。スクリーンをかえていただいてもよろしいでしょうか。

スクリーンに映っておりますのは、区民の健康づくりイベントの一つで、北区を流れる石神井川沿いの桜をめぐる6.5キロの桜ウォークとなります。区民の方がボランティアとなって、区と協働で開催をしております。例年2,000～3,000人の方に御参加をいただき、大変好評なイベントとなっております。

そのほか、北区では、平成10年の第10回さくらサミットを開催させていただいたことをきっかけに、飛鳥山公園で、区民の皆様による、北区さくらSA\*KASO祭りというイベントを開催してございます。江戸の庶民が楽しんだ花見を現在に復活させ、また未来へ伝えていこうという有志の方たちによって始められたもので、ステージのアトラクションのほか、地域の商店や北区の名品など、地域色のあるものを中心に、飲食や物品販売などを行って、非常に楽しまれております。

また、北区は観光ボランティアの方たちも多くおまして、北区の観光コースを御案内するという方たちと一緒に、観光振興に取り組んでいるところでございます。

続きまして、スクリーンをお願いいたします。こちらの写真ですが、北区の新たな桜の名所となります。場所は荒川の河川敷ですが、一般の方たちが里親になりまして、土手に約110本の桜を植えてございます。

また、平成22年から2カ年にかけて、土手の斜面500メートルにわたって、6万4,000株の芝桜を植えました。23区最大規模の植栽となっております。写真では欠けておりますが、白とピンクの芝桜で、K I T A・C I T Yという巨大な文字が描かれてございます。

北区は東京の北の玄関口に位置しておまして、東北、上越方面から東京を訪れる人が、最初に目にするのがこちらの風景であることから、訪れる人の目を楽しませようと、このような形をしております。

北区の桜を生かしたさまざまな取り組みを御紹介させていただきましたが、北区では、歴史に根差した飛鳥山の桜を中心に、江戸の庶民が楽しんだように、桜をめぐることの楽しさを知ってもらい、それをきっかけに北区を知って、より好きになってもらうためのさまざまな仕掛けづくりを、区民の方と一緒に取り組んでいるところでございます。

ぜひ北区に一度訪れていただければと存じます。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

続きまして、新発田市さん、よろしく申し上げます。

○二階堂市長（新潟県新発田市） それでは、新発田の桜について、話をさせていただきたいと思います。

まず初めに、当市はかつて長堤十里、東洋一とうたわれた壮大な加治川桜堤がありまして、東洋一というよりは、世界一であったのではないかと考えております。

加治川桜堤は、大正3年に、全長約12キロ、そして、坂井川という支流もあります。それも合わせますと、約16キロに6,000本のソメイヨシノが植樹をされたものであり、まさに見る者に大きな感動を与えておりました。

最も盛んな時代は、昭和30年代であります。当時はこれほどの桜並木は珍しかったものですから、加治川にかかる鉄橋があるんですけども、そのすぐ近くには、わざわざ臨時列車の停留所がつけられるほどの盛況ぶりでありました。まさに庶民の楽しみ、あるいは旦那衆が芸者衆を総揚げし、憩いの場でもあったということでもあります。

しかし、残念なことでありますけれども、加治川の桜堤は、昭和41年、42年、2年連続の大水害を受けまして、大打撃を受けたわけでありまして。当時、私は中学校3年、高校1年でありますので、私ぐらいの年代までは、当時の面影を知っておるんですが、若い世代は、あでやかであった長堤十里という加治川の桜を知ることはありません。

こういう水害、河川の拡張等によって、桜が全部伐採をされたわけでありまして、何とかもとの加治川の桜堤を復元したいという思いがございまして、こういう状況を受けて、市内外から要望が上がってまいりました。市民主導によりまして、植樹が進められました。現在では約2,000本の桜並木が形成されるまでに復元をされております。加治川の桜堤は、かつての姿を取り戻しつつありまして、開花時期には、多くの市民や観光客に癒しと感動を与えるということで、当時ほどではありませんけれども、少しずつ観光客の皆さん方にもおいでいただける、そんな状況になっております。

加治川の桜堤のほかにも、私どもには、市内の至るところに桜の名所があります。4月は、新発田を華やかに桜色が染めますけれども、例えば大峰山、あるいは新発田城址公園、月岡温泉の桜などもあります。

その中で、日本一小さな山脈である櫛形山脈に大峰山というものがあります。そこに椽平桜樹林というものがありまして、これは国の天然記念物に指定をされているわけでありまして。これは自然交配をしていくということで、変種も含めて、現在40種類、1,000本の山桜を見ることができます。人の手によって植樹された桜も結構でしょうけれども、こういうふう自然交配をしながら、自分たちで新しい品種をつくっているというのも、また一興があるのではないかと考えております。

終わります。

○篠田コーディネーター 御協力ありがとうございます。

それでは、五泉市さん、よろしく申し上げます。

○伊藤市長（新潟県五泉市） こんにちは。五泉市であります。

新潟県から福島会の会津若松のほうに向かいます、新潟駅から大体40分ほどの地であります。

五泉市の桜を紹介させていただきます。

市内の桜は、ほとんど学校、公園に植えられているわけでありましてけれども、先ほど司会者から紹介がありました村松公園は、明治39年の日露戦争の記念公園として、陸軍が造成いたしました。そこに3,000本の桜が植えられております。

もう一つの桜は、昭和3年に国の天然記念物に指定されました、小山田の彼岸桜樹林とは、山の中腹から山麓にかけてまして、桜が咲き誇っているところであります。

もう一つの特徴の桜は、穂先八重彼岸桜です。これは可憐な花でございます。（スライドとはちょっと違う話をしておりますけれども、）奈良時代に絶滅したと言われている桜の異種でございまして、それが発見されまして、村松公園にひっそり咲いていたわけでありまして。

昨年からのサミットに参加させていただいております。各務原市さんにお分けさせていただきまして、喜んでいるところであります。奈良時代に絶滅したということで、それぞれの桜には課題があります。残念ながら、昨年、原木が枯れました。大変残念だったわけではありますが、平成20年に培養で芽から50本ほど生きておりまして、つながったということです。トキではありませんけれども、種の保存ではありませんが、各務原市に、今、子供が行ったということで、喜んでいるところであります。これを守っていかねばならないと思っております。

小山田の彼岸桜も、観光客といいますか、遊歩道をつくったり、東屋をつくったりしているわけではありますが、根が踏み荒らされて、大変傷んでいるということでもあります。目通りで大体3メートルの巨木が多くありまして、訪れる方も喜んではおられるんですが、根が傷むということで、傷み出しています。

先ほど申しましたように、村松公園の桜も明治39年でありますので、古木であります。大変厳しい段階に入っているということでもあります。

まちづくりにおきましては、五泉市は花シリーズでありまして、水芭蕉から桜、チューリップ、牡丹ということで、一連の花をめりながら、まちづくり、また市民の皆さんと一緒に育てている市であります。よろしくお願ひしたいと思ひます。

以上であります。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

次に、高山市、お願ひします。

○西倉副市長（岐阜県高山市） 岐阜県の高山市でございます。飛騨高山から来ました。

時間もございませんので、早速、本題に入らせていただきますが、私からは、概要、桜におけるまちづくり、新しい地域資源の活用、その3点についてお話をさせていただきます。

高山市は、ごらんとおり、日本一広い地域でございます。面積は東京都とほぼ同じ2,077平方キロで、ごらんのスクリーンに山が見えますが、飛騨山脈、北アルプスの山脈ですが、その頂上まで高山市のエリアでございます。そういった広大なエリアの中に、文化、自然、さらには奥飛騨温泉郷ですとか、飛騨牛ですとか、そうした豊富な観光資源を有しております。

地理的にも、東海地方と北陸地方を結ぶ自動車道が全線開通し、名古屋からは2時間です。また、フランスのミシュランの3つ星をいただいております、金沢、白川郷、高山、そのエリアは3つ星街道ということで、国際的にもPRをさせていただいております、年間400万人のお客様に訪れていただく観光都市でございます。

高山市の桜の取り組みでございますが、ごらんの絵は、ちょうど赤い中橋を春の高山祭の屋台が練り歩いており、そこに桜が満開ということで、古い町並みを初めとする高山市の歴史文化遺産、そうしたものと桜をセットで楽しんでいただくということで、いろんな資源と一緒に楽しんでいただけるような魅力づくりに努めさせていただいております。

それと、支所地域になりますが、一本桜でございます。これは国指定天然記念物でありまして、1,000年余の樹齢を誇っております臥龍桜、ちょうど龍が臥した姿に似ているということから名づけられております。また、先ほど篠田先生からお話がありました、御母衣ダムという水力発電のダムの湖底に沈む運命であった荘川桜は、県の天然記念物に指定されており、そうした市を代表する資源もしっかりと保存してまいっております。

特に老木の定期的な保存・保護をしっかりと行うとともに、地域住民の組織によりまして、二世桜の育成に努めており、桜の里づくりですとか、官民一体となった名木の保存・活用に努めておるところでございます。

新しい取り組みとしまして、絵にございますのは、ちょうど五色ヶ原の森の布引滝というところでございますが、乗鞍岳の裾野3,000ヘクタールの広大な森林地帯に溪流、滝、池、湿原、そうした豊かな自然の中で、山野草ですとか、野生植物、有識者からも評価を受けている手つかずの秘境がございます。そうしたところは、自然環境に無理のない遊歩道をつくったり、さらには休養施設、避難所、そうしたものを整備し、自然を楽しく・正しく理解していただく指定ガイドの同伴ですとか、入山者の制限、そうしたものをすることによって、本来の自然を保存し、継承し、さらに活用していく。そうした取り組みを進めさせていただいております。そうした自然と一体となった連携を課題と考えております。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

続きまして、各務原市、お願いします。

○金武都市建設部参与(岐阜県各務原市) 岐阜県の各務原市でございます。

場所的には、名古屋から車で30～40分ぐらい、岐阜県と愛知県の県境にある15万人の都市でございます。

私どもの桜は、百十郎桜と言いまして、各務原市出身である、歌舞伎役者の市川百十郎さんという方が、この川の完成を記念しまして、1,200本の苗木を寄付していただきました。それを当時の市民の方が植えたものでございます。

当然桜が入りますと、保全が必要になってきます。市内で1年間勉強された方が集まりまして、保全ボランティアができております。百十郎桜保全ボランティアという名前の方で、毎週月曜日に枯れ木の剪定とか、除草作業をやっていただいております。

これは桜祭りの写真なんですけれども、桜祭り限定の船が出ますので、これを楽しみに多くの方がお見えになります。

私たちの桜に関する考えとしましては、桜は「日本の花」であります。きれいな花を見られるのも、先輩のおかげでございます。我々は、将来のために、少しでもいい花が咲くような桜を育てなければならないと思っております。市民から百十郎桜を伸ばしたい、桜回廊都市をつくりたいという要望が多くありました。その要望をもとに桜回廊都市計画をつくりまして、毎年300～400本の桜を伸ばしてまいっております。家族で1本ぐらいですけれども、植えていただいております。

桜だけではなくて、桜に関係ないことも始めまして、中山道鶉沼宿という宿がございます。この宿場町を再生しまして、多くの観光客を呼び込もうと思っております。

これはイベントをやっている写真でございます。

以上です。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

それでは、本巢市さん、お願いします。

○藤原市長（岐阜県本巢市） 本巢市市長の藤原でございます。

それでは、私から本巢市の取り組みをお話させていただきたいと思います。

本巢市は、平成16年に3町1村が合併をいたしまして、南の3町は岐阜市と接しています。北の根尾村が福井県境にあるということで、大変面積の大きな町になりまして、南は農業・商業・工業の町、北、根尾地域、淡墨桜のあるところがいわゆる観光を中心にした町でございます。ただ、御案内のように、観光もどんどん過疎化をしまいいりまして、今、我々の課題は、根尾地域、淡墨桜のあるところが、これからも生き延びていくためには、どうするかということが一番大きな課題になっております。

そうした中で、淡墨桜というのは、先ほど御案内がありましたように、1,500年余、継体天皇手植えの桜と言われておりまして、日本三大桜の一つです。幹周りが約10メートルぐらいございまして、三大桜の一つということで、国の指定天然記念物になっております。

ちょうど今日辺りは満開の時期でございまして、春のシーズンには、この桜の木1本に十数万の人が、1週間、10日の間に一気に押し寄せる地域でございます。年間を通じて20万人ちょっとの方々が、この公園を訪れるわけでありまして、課題は、公園として何とか通年観光にして、ぜひ多くの方に来ていただいて、根尾地域の過疎化を少しでも防いでいきたいと思っております。

この地域は、ずっと前から温泉、ホテル、コテージ等々も整備をしておりますし、今、写真が出ておりますけれども、これは昨年からLEDを使ったライトアップをするようになりまして、夜もこの地に人を寄せようということで、計画をさせていただいております。

いずれにいたしましても、点である観光資源をこれから線をつないで、近隣市町とも提携をしながら、ここに多くの人を勧誘できるような構想を、今、練っておりまして、近隣の3町と一緒に、計画を進めさせていただいております。この地域をこれからも守り育てていく、淡墨桜をこれから100年も200年も続けていきたい、そういう思いで、この地域の活性化に取り組んでいるところでございます。

そして、ここにあります「もとまる」というのは、新しく市になりまして、10周年を記念して、マスコットキャラクターをつくりました。3月9日にできたものでございます。これから全国のキャラバン等に使っていきたいと思っております。

ぜひ本巢市の根尾にお越しいただければと思っております。

ありがとうございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

続きまして、吉野町さん、お願いします。

○北岡町長（奈良県吉野町） 奈良県吉野町でございます。

吉野山の桜は、今から1,300年前、山岳宗教でございます修験道の御本尊、蔵王権現の御神木となりまして、蔵王権現をまつる金峯山寺への参詣が盛んになるにつれまして、御神木の献木として植え続けられ、数をふやしてまいりました。現在、桜の数は、全山で約3万本、そのほとんどがシロヤマザクラで、ふもとの下千本から中千本、上千本、奥千本と数週間かけて咲き上がるさまは、見事でございます。

しかし、近年、桜の衰退が目立ちまして、3年前に吉野町で開催いたしましたさくらサミットでも、桜を未来に守り育てようというテーマで、桜の保護・保全につきまして、皆様方の貴重な御意見を頂戴したところでございます。

吉野山の桜は、我が町の大切な観光資源であるとともに、世界遺産、紀伊山地の霊場と参詣道を構成する文化的景観であることから、文化財保護の視点で桜を保護し、継承することとし、総合計画におきまして、桜の町プロジェクトと命名して、その推進を重点事業としているところでございます。

平成23年度には、吉野山の桜の現状を科学的に分析・把握するために、リモートセンシングを実施し、貴重な調査データを得ることができました。

また、桜の保全に対しまして、さまざまな団体がかかわり、それぞれの形で実施しておりましたが、団体相互の調整を行い、どの方法が吉野山の桜にふさわしいか、吉野山独自の桜保全管理方針を打ち出すために、団体で構成する吉野山桜の学校を設立いたしました。

活動といたしましては、昨年度は調査データをもとに吉野山のさまざまな場所で、肥料の養分試験やナラタケ属菌類の杭打ち試験、立ち木の密度試験などの実証実験を行いました。また、吉野山での桜育成園の造成、桜に関する書籍・参考文献・映像・音楽などの情報集積、広報運営を行える機器設備の配備を行いまして、誰でも吉野山の桜の情報を共有することができるような環境を整えました。

今後は継続的な調査と長期的な実証実験を行いながら、調査・実験・実践・普及というサイクルの実現に向けまして、マスタープランの作成と人材育成を図っていきたく考えております。

桜以外の観光資源といたしましては、平成23年度に森林セラピー基地・セラピーロードの申請を行いまして、昨年3月に認定を受けました。森林セラピーとは、癒し効果が科学的に検証された森林浴効果のことを言いまして、森林環境を利用して、心身の健康維持・増進、疾病の予防を行うことを目指すものでございます。長年にわたって育てられました美しいものを、観光と結び付けたいと考えているところでございます。

吉野の森に一度足をお運びくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

以上です。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

それでは、雲南市さん、お願いします。

○藤井副市長（島根県雲南市） 島根県雲南市副市長の藤井でございます。

雲南市は、島根県の東部に位置しております、松江市、出雲市に隣接いたしております。

市内の南北に一級河川斐伊川が貫流いたしております、中国山地から雲南市、中流の出雲市、宍道湖に注ぎまして、中海から日本海へ注いでいる、153キロの一級河川でございます。ここはいわゆる『古事記』でうたわれております、ヤマタノオロチ伝説にまつわる川でございます、市内にはそうした伝説にまつわる地域がたくさん点在している状況でございます。

斐伊川堤防桜並木でございますけれども、平成2年に財団法人日本さくらの会より日本桜名所100選に認定していただきました。ソメイヨシノを中心に、およそ2キロにわたって、800本のトンネルになっております。

今年は先般の土日でイベントを組んでおりましたけれども、雨と風に見舞われまして、散ってしまいました。そうしたことも当然あるわけでございますけれども、少し残念な気がいたしておりますが、例年たくさんの観光客の方にお運びいただいております。

昭和63年、1988年、合併前の旧木次町で、初めて「さくらサミット」を開催していただき、斐伊川堤防桜並木を見ていただきましたが、花つきが余りよろしくないですということでございまして、たくさんの先輩の皆様、全国にはもっとすばらしいところがあったわけでありまして、私どもの取り組みの甘さを反省いたしまして、平成2年から桜守さんを置きまして、桜守さんを中心に、森林組合さんとか、あるいは地域の住民の皆さんとともに、桜並木を育ててきております。

現在、雲南市の桜の会は、700名余りの会員がおります。本日は吾郷会長と一緒に来ておりますけれども、当面、会員を1,000名に増やしていこうということと、市内に2年前から「さくらどころ支援」という制度を設けました。調べたところ、雲南市内で、今、20本以上あるところが47カ所、歴史のある一本桜が17カ所、計64カ所ございまして、そういうところを「さくらどころ」ということでマップをつくりまして、これからさらに情報発信をして、地域の皆様の植栽運動を支えていこうということで、これから取り組んでまいり所存でございます。

以上でございます。よろしく願いいたします。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

それでは、最後に大村市さん、よろしくお願ひします。

○小野副市長（長崎県大村市） 大村市でございます。

大村市は、大村氏という一つの家が1,000年近く支配してきた土地でございます。

地理的には、長崎県の中央部に位置しまして、観光都市として有名な長崎市や、ハウステンボスを有する佐世保市との間にありまして、真ん中の大村湾は超閉鎖性水域でございますが、その中に浮かぶ島、大村の離れ島に1975年に世界初の海上空港がオープンしました。そういう意味で、大村市は、長崎県の玄関口でございます。

おかげさまで9万3,000人の人口でございますが、さらに人口増を続けておりまして、若い人の流入によりまして、現在のところ、20.7%の高齢化率ということで、比較的恵まれております。

9年後には、九州新幹線の西九州ルートの特設駅ということで、大村の新駅ができるようになっておりまして、これに向けた待ったなしの観光振興が急がれております。

大村市は、これまで花と歴史を中心に観光に取り組んでまいりました。

日本初のキリシタン大名、大村純忠という人がいました。大村純忠は1582年、天正10年に、天正遣欧少年使節ということで、4人の少年をローマに派遣しております。少年たちは印刷機や海図を持ち帰っております。

また、花ではシャクナゲとか、花ショウブ、彼岸花等々がございますけれども、中でも桜が中心でございます。市内全体で1万3,000本ございます。さらに市制施行80年を迎えます34年には、これを1万4,000本にふやしたいということで、推進計画を立てております。

桜の一番濃厚な部分は、大村の玖島城跡にできております大村公園です。ここには2,000本の桜がありまして、中でも先ほど紹介がございました、八重の変種でございます大村桜が約300本植えられております。こういった八重系のものと、ソメイヨシノを合わせて、できるだけ長い期間桜が楽しめるようになっております。

そのほかの花を通じまして、通年化を図りたいところでございますが、花を見せるだけではどうしようもないということで、先ほどの講演にございましたように、歴史性、食糧、工芸といった課題が、桜についてはございます。

また、最近のよい話としましては、お配りいたしました、大村夢ファームシュシュというグリーンツーリズムの成功例が生まれてきております。農家の皆さん方が平成10年に立ち上げましたので、15年近くになりますけれども、農業体験をさせたり、結婚式場みたいなこと、星の見えるレストランを経営したり、あるいは農家民泊をやったり、いろいろな活動をやり、年間に50万人を寄せるまでになりました。この成功例で、多くの自治体にお越しいただいております。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

一通り14団体から事例発表をいただいたわけでありまして。

これからフリーディスカッションに入るわけでありまして、何度も言いますけれども、12時45分がお尻でございます。なかなか容易でないところがございます。ということで、議論が散漫になってはいけませんので、3つの視点に絞ります。皆さん方とフリーディスカッション、議論をしていただければと思います。

最初の視点は、現在、桜を持っていらっしゃるわけですが、今の話にも出てきましたが、大変老木化している。病気になっているということで、非常に悩んでいらっしゃいます。そういうことについての対応をまず議論していただく。

2番目は、桜を素材として、それを観光にどう生かしているかということです。そうい

う点が 2 番目です。

3 番目は、これも多くの方々から出ておりますが、通年観光を考えた場合、桜だけではしんどい。他の観光資源とどうタイアップしていくかという点です。

この 3 つの視点について、議論をしていただければと思っております。

順にやっていったほうが、議論がしやすいので、まず最初に、視点 1、現存の桜の老木化・病気等への対応、古い桜を守ってきた事例ということについて、いろいろとディスカッションをしていただければと思います。

先ほどずっとお聞きになって、ソメイヨシノというのは、寿命が 60 年ぐらいだということで、戦後、日本は戦争でもって破壊されてきたものですから、日本を美しい日本によみがえらせようという意味で、ソメイヨシノが日本各地に植えられてきたんです。それが 60 年ということになると、ちょうど寿命に差しかかる。日本列島どこもそのことでもって悩んでいるのではないかと思います。ところが、一方では、ソメイヨシノが 80 年、100 年という命で、今も生きている例あるわけです。どうしてそういうことが可能なのか。

仙北市さんは、桧木内川堤のソメイヨシノは、国の名勝にもなっているわけです。60 年の寿命と名勝を抱えていることから、恐らく大変な苦勞をされながら、延命策を図っていらっしゃると思います。先ほどちょっと出ましたが、これについて、もう少し詳しくお話をいただいて、ディスカッションの材料にさせていただければと思いますので、仙北市さん、その点について、いかがでしょうか。

○中村文化財課参事（秋田県仙北市） 私はプロではないんです。今日、黒坂さんと一緒に来たんですけれども、とにかく丁寧に大事に育てれば、桜はいい花を咲かせる。そういうことで、毎年肥料をやったり、常に桜を見ながら管理している。あと、昨日も黒坂さんに行ってもらったんですけれども、土壌改良などをして、今の木がそのままの状態での桜を咲かせるために、萌芽更新という言葉を使わせていただきました。正しくはないと思いますがけれども、根元のほうから新しい芽が出て、結構大きい木になってきています。ですから、本体が枯れても、それが次に咲いていくということで、私は直接やったことがないんですけれども、そういう感じでもっと関心を持っていただいて、とにかく長く育てていきたいし、立派な花を咲かせたいと思っております。そんなところでよろしいでしょうか。

○篠田コーディネーター 寿命が 60 年でも、決して諦めることはない。愛情を注いでいけば生き延びるんだ、端的に言えば、そういう話だと思います。

ちょうどここに黒坂さんがいますので、専門家として、今のことにプラスして、こういうところを視点として持っていくといいんですということがありましたら、せっかく樹木医でいらっしゃいますので、話をしてもらって、それで皆さんに意見を交わしてもらったらと思いますので、よろしくお願ひします。

○黒坂氏 突然で驚いていますけれども、ソメイヨシノというのは、非常に病気に弱いです。てんぐ巢病という特有の病気がありますので、これを取らなければいけないんです。

農薬では防除できないんです。ただひたすらに切るよりほかはないので、非常に厄介です。それと枯れ枝です。あとは丁寧に肥料をやっていただく。これだけでも継続していけば、非常によくなります。

それでもだめでしたら、根を掘り返して治療をするということです。大体60年に枯れるというのは、根に根頭癌腫病という、大きなこぶができるんです。それを切って、取って、その後、処理をするわけです。こうしますと、だんだんよくなってきます。人間みたいに、点滴とか注射をしたら、すぐによくなるわけではないんです。大体5年単位でかかります。

簡単に申し上げますと、そういうところでございますが、私の経験ですけれども、手をかけた分だけは、必ず応えてくれるはずです。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

今、経験に基づく処方のお話があったんですけども、ソメイヨシノで悩んでいらっしゃる自治体が多いと思うんですが、せっきくの機会ですので、手を挙げていただいて、具体的に御質問をいただけますと、大変ありがたいと思います。ございませんか。

豊島区長さん、ソメイヨシノの発祥地でございますけれども、いかがですか。

○高野区長（東京都豊島区） ソメイヨシノは60年ということが言われておまして、うちも60年を過ぎたソメイヨシノはたくさんあります。豊島区は、都市化された形の中で、桜は育ちにくい環境であります。風などでかなり傷んでいます。桜に対して、病院ではないんですけども、それを診察するといいますか、一つひとつ丁寧に診察しておりましたら、3分の1ぐらいは、もたないのではないかと診断もありました。私は専門ではありませんけれども、うちの中の公園緑地課が、かなり勉強してやっていますので、今日ございました、保存のことについては、参考にさせていただきます。

今日のサミットでは、どうやってそれぞれの地域の方が保存をしているか。それに大変興味を持ち、関心もあります。また、今日、いろいろお話を聞きましたら、うちが一番桜が少ないですが、皆さんは千本単位、万単位という形の中で、たくさん桜を育てています。そのことについても、ぜひお聞かせ願えればと思っております。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

せっきくの機会ですが、ほかにもございませんか。こういうときは、なかなか質問が出ないんです。

そうしますと、私から質問をしたいと思うんですけども、吉野町さん、科学的な分析ということで、先ほどリモートセンシングという言葉が出てまいりました。もう少し具体的に、そして、これが他の自治体の桜において、活用できるものなのかどうか。そこら辺についてお話をいただくと、大変ありがたいと思います。

○北岡町長（奈良県吉野町） ありがとうございます。

リモートセンシングというのは、上からヘリコプターを飛ばしまして、上から電波で調べるという形でございます。木の形、地面、あるいは幹の太さとか、全てチェックする。

50ヘクタールに3万本という桜でございますので、個別にチェックをしていただくんですが、全木を調査するわけにはいかないの、ある程度標準木となるものを入れながら、全体はそれで覆って行って、チェックする、そういう形をやらせてもらったんです。

吉野桜は1,300年の間に何回も悪くなったことがありまして、基本的にだめなものは、植えかえていくということでやってきているんですが、特にここ十数年ぐらいは、県が調べて、そのとおりにやると、今度は肥料ばかりが多くなったり、ちょっとおかしい。ここ5～6年は、30年ぐらいで咲き誇らなければならない桜が突然枯れたりするので、それを調べたら、その原因はナラタケ菌ということでした。そういうことを調べながら、個別にきちんとやっています、リモートセンシングというのは、調べられないところをやる時には有効かもしれません。

そういうことで『読売新聞』とNHKに取り上げていただいたので、吉野の桜を守ろうという動きがいっぱい出てきました。そのおかげで、いろんな団体さんから寄付をいただくんですが、あるいは来ていただいて、サクラランボを拾って、苗を育てて、また植えに来る。6月ごろにサクラランボを植えに来る、翌年の冬に植えに来るという形で、春以外にも桜を育ててやろうということで、頻繁に来ていただけるようになったことは、いいと思っております。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

空から見て、幹の太さなどは上からでわかるわけですがけれども、病気になっているかどうかというのは、それではわからないわけですね。

○北岡町長（奈良県吉野町） それは京都大学の森本先生という方を中心に、調査チームでしていただきまして、何本か根を掘ったり、いろんなことを調査しながら、土壌の調査、水の流れ、そういうことを全部やっていただきました。それは3年かかったんですが、大体メカニズムがわかりました。よくしていくのは、これからだということでございます。

○篠田コーディネーター そのメカニズムというのは、ある意味同じような地形のところでは、他の自治体辺りにも、ひょっとすると、有効活用できるかもしれないですね。

○北岡町長（奈良県吉野町） そうですね。桜に何が影響するかというと、我々もそれだけではないと思っていますので、ただ、そういう形もあるということは、お知らせできるかと思えます。

○篠田コーディネーター 日立さんもたしか山に桜がたくさんあって、規模は違うかもしれませんが、同じような悩みがあるのではないかと推測されるんですが、今のお話を聞かれていかがですか。

○小川副市長（茨城県日立市） 日立市のソメイヨシノの被害というのは、市街地に1万4,000本ぐらいあるうち、約42%ぐらいがてんぐ巣病等にかかっているのではないかと調査が出てきております。したがって、公害の歴史とともに歩んできた日立市の桜の原点は大島桜でございますが、それから市街地のほうにソメイヨシノを植えてきたという経緯がございますので、せつかく市民と企業と行政が一緒になって取り組んできた桜であ

りますソメイヨシノについては、今、御意見があったことを参考にしながら、これからもそういう対策を講じてまいりたいと思っております。

一方、山の桜であります大島桜は、野生で非常に強いものでございますので、現在、鞍掛山という山に500本ぐらいあるのですが、これを春と秋に、市民のボランティア200名ぐらいで整備をしております、これから100年後に500本あるうち200本に選別をして、巨大な大島桜をつくっていかうという取り組みを進めております。平成20年から実施しておりますが、新たに苗木を植えるのではなくて、今ある大島桜を100年後に向けてしっかりと維持管理することで、巨木の大島桜の山をつくっていかうという試みを既に始めております。この取組には、企業からも作業に豚汁などを出していただいたり、寄付金をいただいたりという企業城下町としての利点もございますので、その辺のところを大いに生かしながら、これからも桜を守っていきたいと思っております。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

大島桜というのは、先ほどのソメイヨシノに比べれば強い。先ほど260万本植えられたという話がありましたね。

○小川副市長（茨城県日立市） そうです。大正年間に東洋一の大煙突をつくりまして、公害を克服した一方で、枯れてしまった山全体に何が一番強いかということの研究した末に、かなり強いものの中に大島桜が入ってきたということでございますので、260万本ぐらいの植栽を始めたということでございます。

○篠田コーディネーター 260万本は、今も260万本が生き続けているんですか。

○小川副市長（茨城県日立市） 年数が経っておりますので、かなり老木化しているものもあるかと思えますけれども、この季節になりますと、全山が白色に染まりますので、かなり本数があると思っております。

○篠田コーディネーター わかりました。

仙北市さんは、弘前市の大変有名な方の知恵を学んで、さらにブラッシュアップして、現在、治療に当たっていらっしゃるわけですので、もしそれぞれの自治体で何かあれば、黒坂ドクターがいますので、遠慮なく相談してくれということだと思います。

視点1は、こちら辺でとどめまして、視点2に移りたいと思います。現存の桜を一つのネタにして、観光にどう活用しているかということです。

こういう点については、いろいろとあると思いますが、先ほどの二瓶先生の話に、地域資源の活用として、いろいろなヒントがあったかと思えます。たまたま『朝日新聞』のコラム欄を読んでいましたら、先ほどの二瓶先生と同じことをある方が言っていました。長い歴史のある桜というのは、伝説に包まれておって、物語がある。これが魅力なんだということを言っていたら、確かにそういう点では、歴史がある。別に1本の桜でなくても、群生した桜でもいいんですけれども、それぞれに物語があるのではないかと思います。

前回、各務原市で行った際に、東京都の北区について、吉宗が飛鳥山に桜を植えなさいということで植えたけれども、現在の品種はソメイヨシノ。それだったら、近々の歴史しかない。一体どういう品種だったのかという話をいたしまして、変な話、宿題になっておりました。今日はその成果を御発表いただける。おもしろい物語がそこに隠されておればいいと思いますので、発表をお願いします。

○雲出地域振興部副参事（東京都北区） 北区です。

昨年、宿題をいただいておりました、こちらについては、北区の博物館の学芸員さんだったり、図書館の専門員さんに文献等を調べていただきましたので、今日発表させていただきます。

昨年の宿題は、吉宗が飛鳥山に植えた桜の種類でございますが、将軍のゆかりの地について、公式記録が書いてございます御場御用留というものがございますが、その中の文献に江戸城の吹上で育てられた山桜の苗木を、享保5年に、当時、優れた植木職人で、隣の豊島区さんの地域になります、染井というところで植木職人をしていらっしゃった、伊藤伊兵衛さんという方が、飛鳥山の近く山を持っておりました、そこに江戸城の吹上で育てられた山桜の苗木を一旦仮置きしまして、翌年の享保6年に、飛鳥山に1,270本植えたという記録が出てまいりました。

山桜としか書いてなかったんですが、ただ、中の一部に、アカメザクラという記述が見られることから、一部アカメザクラという品種が含まれていたのではないかということです。ただ、アカメザクラがどういうものかという、そこまでは調べられなかったんですが、そのような品種が山桜の中に一部あったということが判明いたしました。

以上です。

○篠田コーディネーター そういうことで、大変な努力で調べていただきました。飛鳥山を素材とした浮世絵があるので、浮世絵に桜が描かれている。それも何かの材料になるのではないかという話をしていましたけれども、浮世絵は材料にはならなかったんですね。

○雲出地域振興部副参事（東京都北区） 特に浮世絵のほうではなく、文献のみで調べさせていただきました。

○篠田コーディネーター 昨年、吉野町の山本さんから、吉野の桜が行ったのではないかという話もありましたけれども、今、文献によってきちんとした調べをしていただいて、大変よかったです。

1,270本という数字は、よく北区さんの発表では出るんですけども、どういう品種かというところまでは、今までなかったの、今後はそれをぜひともパンフレットに刷り込んでいただきまして、PRしていただくとありがたいと思っております。

昨日、津山市の作楽神社を訪問しました。津山の皆さんは、先刻御存じでございますが、桜を名乗った神社があるというのは、それだけでクエスチョンマークが頭に浮かんで、調べてみたくなり、聞いてみたくなります。昨日は神社に伺って、宮司さんから非常に詳しく話を聞かせてもらいました。これも一つの物語として使えるのではないかという感じが

いたしたところであります。

新ひだか町さんなんですけれども、急に質問をして、どうなのかわかりませんが、前回、大村桜が新ひだか町に見つかったということで、なぜなのかということになりました。まさに大村市さん特有の桜なわけです。それが何で北の新ひだか町にあるのかということで、不思議ですという話をして、ここにも深い物語があるのではないかという予感を持ってもらったんですが、その点について、おわかりでしょうか。

**○富田副町長（北海道新ひだか町）** 私どものほうで、桜守といいますか、静内桜の会というものがございまして、そこで専属になっているんですが、浅利政俊先生という方がおられまして、静内地方によく来ていただきまして、二十間道路ばかりではなくて、静内にある桜をいろいろと調査していただきました。

それと、新ひだか町は合併しました。私どもは静内なんですけれども、旧三石町のほうにもいろいろと桜があるということでした。

新たな桜を移植する際に、どのような樹種が合うのかということもありまして、浅利先生にいろいろと調査をしていただきまして、その中で、わかったのではないかと思うんですが、経過等については、伺っておりませんので、ちょっとわかりません。

二十間道路そのものは、エゾヤマザクラ、カスミザクラ、ミヤマザクラ、この3種類ですの、恐らく一般家庭のほうで見つかったのではないかと記憶しております。

**○篠田コーディネーター** ちょっと不思議な感じがありましたので、お聞きしたんですけれども、なお追跡して調べていただきますと、ありがたいと思います。

先ほどストーリーという言葉が二瓶先生からありました。再度、日立さんになってしまいうんですが、事例報告書の中に、ストーリー化をして、他の自治体の桜と差別化を図っていくんだという文言が見えたんですけれども、ストーリー化というものの具体的な内容について、お話いただけますと、参考になると思います。

**○小川副市長（茨城県日立市）** 先ほど申し上げましたように、日立市の桜は、煙害を克服しながら、受け継いでまいりました桜でございますし、桜というものは、どこでも花が咲いての桜でございますので、今のイベント、祭りを地域の特徴を活かしかに工夫して開催していくかということが一番だと思っております。

私どもといたしましては、煙害克服のシンボルとなっております煙突とか、日立工場の歩み、業績を展示している日鉱記念館などをめぐりまして、産業の発展や環境への取り組みを学ぶスタディツアーというものを試みていきたいと思っております。

また、先ほど鞍掛山の100年の巨木づくりについて申し上げましたが、こうした春、秋の整備事業を旅行者自身が体験していただくような体験ツアーなども、桜に対する取組の一つになると存じますので、そういうところから呼びかけを進めてまいりたいと思っております。

もう一つは、前宣伝になってしまうんですけれども、日立市では、ひたちシネマ制作サポートプロジェクトということで、日立市を舞台にした映画づくりを促進しており、毎年

250万円ずつ補助をいたしまして、映画をつくっております。

去年つくりましたのが『桜並木の満開の下に』という作品でございまして、これは北野オフィスさんが後援をしてくださり、約1,000万円ぐらいかけてつくったんです。出演は例の三浦友和さんと百恵さんのお子さんと、貴大さんという方です。ものづくりのまち日立を題材にして、いろいろな事件が展開されるストーリーとなっております。日立市の桜がふんだんに取り入れられた作品でございまして、4月13日にテアトル新宿で封切りをいたしまして、これから名古屋、大阪、京都という形で上映してまいりますので、機会がありましたら、ぜひともごらんいただければと思っております。

こういった形での活用やPR活動も大事な取り組みではないかということでございまして、手前みそでございませけれども、御披露させていただきたいと思っております。

以上でございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

先ほどの新田次郎さんの『ある町の高い煙突』という題名の小説は、ドキュメントでしょうか。これが映画化されたということはないんですか。

○小川副市長（茨城県日立市） 映画化はされておりましたが、作品の背景を申し上げますと、新田さんというのは、気象観測所の職員のご経験がある方ございまして、一方、日立市には公害を克服した関係から、天気相談所という気象観測所がございまして。このように行政の中にある事例は全国で日立市以外に一つぐらいしかないと思っておりますけれども、天気相談所の所長の山口さんという方、実は公明党の山口代表のお父さんでございまして、その方と新田次郎さんが親しい間柄だったということがきっかけとなっております。新田さんご自身の気象観測の経験を踏まえ、煙害が発生している地域の部落と日本鉱業が互いに協力し合って煙害を克服してきたという実際にあったストーリーが題材となっており、それが『ある町の高い煙突』という形で小説化されたものであり、広く読まれているところでございまして。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

どうですか。3分以内では話し切れなかったもので、ぜひともここでしゃべらなくてはという自治体はございますか。

市長さん、先ほど途中で切れて、非常にストレスがたまっていたのではないかと思っておりますけれども、物語みたいな話で何かございませぬか。

○宮地市長（岡山県津山市） 物語というわけではないんですけれども、昨日も雑談でちょっとお話しましたが、昨年は各務原で私は初めて参加させていただきました。そのときに津山が初めて加入したということでございまして。私自身は小さいときから、津山といえは桜の町というイメージがあったんですけれども、さくらサミットというすばらしい団体があるにもかかわらず、津山が加盟していなかったということでしたので、今までの市長は何をしておったのかと、思っておるところでございまして。

今日は津山の地で、このようなすばらしい会議が開かれております。これからも桜を通

じて、観光振興を図っていくということにつきましては、私の任期中は毎回参加させていただきたいと思います。来年、たまたま選挙がございまして、もし来年参加していなければ、私は落ちたと思っていただければいいんですけれども、頑張りますので、よろしくお願いいたします。

○篠田コーディネーター 大変な物語でございました。（笑）

新発田市の市長さん、先ほど長堤十里とありましたが、十里というと40キロになるんですけれども、あれはそもそもどういう物語があって、ああいうすごいものができたんですか。

○二階堂市長（新潟県新発田市） 今、新潟市がありますけれども、その辺一体は、戦国時代までは、沼、潟なんです。人は住んでいなかったんです。信濃川、阿賀野川、加治川という、新潟県に大きな河川がありますが、あれは全部1カ所に、今の新潟市に下りていたんです。大正3年にできているんですが、加治川の堀切をつくりまして、日本海へ直接流そうということになったんです。その完成と大正天皇の即位を記念してということで、植えたのが始まりなんです。

先ほど言ったように、それが41年、42年の水害で、全部壊滅をしたということなんです。水害後の復旧はできたんですが、そこに桜を植えようと思ったら、今度、河川法があってだめだということになったんです。副堤をつくりなさいと言われてたんです。つまり堤防の脇に新しい堤防を足すわけです。そこに桜を植えるということで、総工事費で11億7,000万かかったということですから、金のことを言えば、相当の物語なのかもしれません。

やっとなんかできまして、今、市民の段階で、みんなで少しずつ植えていくという状況で、平成元年から植樹が始まりましたので、まだ20年ちょっとですから、木自体は若木だということになります。

○篠田コーディネーター 長堤十里のときの木の品種は、やはりソメイヨシノなんですか。

○二階堂市長（新潟県新発田市） ソメイヨシノです。

○篠田コーディネーター なるほどね。

物語としては、岐阜の庄川桜について大変な物語があったり、淡墨桜についての大変な物語があるわけでありまして、これをやっていると、時間がなくなってしまいます。そう思います、せっかく来ていただきましたので、藤原市長、淡墨桜にまつわる物語、特に保存の観点を含めて御披露いただけますか。

○藤原市長（岐阜県本巣市） せっかく振っていただきましたので、一言しゃべります。

篠田コーディネーターは、岐阜県に何回か来られていて、総務部長をやられ、また副知事でもおられたということで、当時、私も部下で仕えた仲でございまして、大変親しくしていただいています。本当にありがとうございます。

淡墨桜は、保護・保存が大変なものでございまして、1,500年といいますと、一朝一夕では保護・保存ができないということでございまして。昔から地域住民の方々が一生懸命取り組んで、守ってきた。そういう中で、二度、三度と枯死するということ乗り越えて、現

在、生きておるわけでございます。

皆さん御存じのように、作家の宇野千代さんが、34年の伊勢湾台風で折れた淡墨桜を見に来られて、これはかわいそうだ、大変だということで、当時の岐阜県知事、平野三郎さんに直接お手紙を差し上げて、そこから本格的に県、町、村を挙げての保護・保存活動が始まった。その前までは、地域住民が一生懸命やってきたということです。

今、1,500年経ちました。もちろん岐阜大学の林先生、樹木医もずっと就けておられて、やっていただいておりますけれども、これからしっかり手入れをすれば、まだ100年、200年はもちますというお墨つきをいただいております、引き継いだものは、これから100年、200年、我々も地域住民と一緒に守っていきたいと思っております。我々の先祖からいただいたものでございますので、ぜひこれを守っていきたいと思っております。

ただ、1,500年という長い歴史の中で、どうしてこの地に江戸彼岸があったかという、やはり地の利というものがあつたと思ひます。日照の問題、地下水、風をよけられた。1,500年を超えて生き延びられたとうのは、立っている場所にあると思ひます。江戸彼岸、淡墨桜を持っていけば、1,500年、1,600年生きるということではないと思ひます。

淡墨桜は、おかげさまで、北は北海道の稚内から、南は九州まで、子供、孫、ひ孫、そういう木が全国に植わっております。淡墨桜、オンリーワンはここにしかない、一つしかないんですけれども、子孫を全国のあちこちにお配りをしておりますので、これからもそれぞれの地域で淡墨桜をしっかりと見守っていただきたいと思ひます。

いずれにいたしましても、継体天皇お手植えということで、歴史、ロマンがある木でございますので、これからもしっかりと守り通していきたいと思ひます。

振っていただきまして、ありがとうございました。

○篠田コーディネーター ちょっと時間がかかりましたけれども、ありがとうございました。

それでは、視点2はこの辺で終えまして、最後の視点3ということで、他の観光資源を開拓、桜と併用した取り組みをしている事例、この点に移ってまいりたいと思ひます。

桜というのは、時期が限られております。その市に訪ねてくる観光客の7割が、限られたときに来る。桜が終わると、がたっとお客さんが来なくなってくる。落ちるお金もそのときに集中してしまう。さくらサミットをやっていると、毎回、共通した悩みとしてそういうものが出てまいっております。通年観光を考えて、多くの方々に喜んでもらうと同時に、お金を落としてもらう、地域経済を活性化していきたいという思いが、首長さん方は共通してあると思ひます。

そこで、先ほどの二瓶さんの講演の知恵が生きてくると思ひますが、私自身が、今、頭に浮かんだことを申し上げますと、確かに桜は通年ではないわけですが、例えば農業というのは、春も秋も冬もあるわけです。つまり農業というのは、通年産業でもありますし、食も冬の食べ物、夏の食べ物、秋の食べ物がありますので、通年産業です。そういう点を考えますと、農業という通年産業、食という通年産業とどうセットにするかという

ことでやれば、通年産業化につながっていくのではないかという感じがいたしました。先ほどの二瓶さんの話の中で、第1位に食という言葉が出ました。そういう点では、私が言ったような考え方もありだと思えます。

先ほどは時間がないので、ざっとしかご紹介いただけませんでしたけれども、大村市さんには、パンフレットにございますが、大村夢ファームシュシュというものがございまして、大村市でサミットがあった際に、エキスカッションで御案内いただきました。大変すばらしくて、農業の観光化という点で、日本でも先進的なところではないかと思っております。シュシュそのものは、春、夏、秋、冬と四季とりどり使えるものですので、通年観光に役に立つのではないかと思います。そういう点で、もう少しシュシュについて、これができるいきさつなども含めて、現状等について、大変参考になるのではないかと思いますので、大村市さん、お願いしたいと思えます。

**○小野副市長（長崎県大村市）** 大村夢ファームシュシュですが、シュシュというのは、フランス語でお気に入りという意味だそうです。

設立は平成10年ですから、15年目になります。これまで県や市からも、いろんな支援をし、順調に業績を伸ばしてきております。いろんな農産物を委託販売する生産農家は140名です。この地は大村の北部にございまして、福重といいます。第2次農業構造改善事業などで、一生懸命フルーツの里をつくってきておりました。ブドウとか、梨とか、ミカンもとれることから、フルーツの里としてのイメージがあります。

桜の名所と言えば、大村公園に40万人ぐらい来るんですが、もう一つ、深澤儀太夫という捕鯨で成功した人が、農業用のため池としてつくりました野岳湖という池があります。そのため池の周りに桜が植栽されておまして、この間、大村公園が車であふれて行けそうにない。そこで、野岳湖へ行って桜を楽しもうかとなりました。

行くと、途中にシュシュがございまして、シュシュには物すごい人が来ていました。明るい感じのお店ですし、お年寄りや子供も来ている。最初は小屋みたいなところから、農産物販売を始めておりますけれども、ジェラート、ソフトクリームが当たりまして、たくさんのお客さんが列をつくるようになり、そういったのが契機で、何をやってもうまくいく。経営者の理念もしっかりしており、新鮮なもの、季節のもの、おいしいものをセレクトして、持ち込ませている。

その中から、いろいろな事業展開がありまして、先ほど御紹介しました結婚式場なども、通常はレストランの天幕を外して、星空が見える。そういうその地でないといけない結婚式を演出したり、その場所は大村湾を望める丘陵地でございます。そういうロケーションで、夕焼けを見ながら食事を楽しむとか、多面的な展開が、今、できてきております。

グリーンツーリズムの大賞を平成21年受賞いたしまして、経営者に全国各地からの講演依頼がある。そういう中で、いろいろ紹介をする。そうすると、そこから視察をしてみようかということで、いろいろ訪れております。最近では、韓国の全羅北道からも首長さんたちがお見えになっておりますし、この間、私が知事と一緒にそこを視察した際には、一

村一品で有名な大分県大山町から見えていたので、感激しました。

以上でございます。

○篠田コーディネーター すばらしい話です。今の経営者の方、リーダーシップを発揮している方というのは、どうなんですか。こういうことについて、専門的な人だったんですか。単なる農家の方だったんですか。

○小野副市長（長崎県大村市） 農協にお勤めだったと思います。そして、途中で辞めて、考え方としては、こういう展開を考えておられました。現在でも養豚をされて、ソーセージの美味しいものをつくったりしています。

○篠田コーディネーター こういう仕掛けをする。この広さはどのぐらいだとおっしゃいましたか。かなり広がったですね。これも後から調べればいいんですけども、こういう仕掛けをするには、当然金がかかるわけですが、例えば国からお金が来たとか、そんなことはどうなんでしょうか。

○小野副市長（長崎県大村市） 実数はあれですが、いろんな事業を利用しまして、今、展開しているレストラン部分であるとか、農産物の直売所であるとか、パンの加工、イチゴの栽培とか、バナナもやったり、そういう施設は、大体農業の潤沢な制度をいろいろ活用してやってきております。

○篠田コーディネーター こういうものは活用できるということで、三重県にもこれと同じか、これよりも大きいものがありまして、やはり韓国から視察に来たという話を聞きました。農業の観光化というか、通年産業である農業をうまく生かしているという代表例ではないかと思ったんですけども、今の事業については、関心がおありではないかと思えます。せっかくですので、大村市さんに御質問等がございましたら、どうぞ。

各務原市さんはどうですか。人参を入れたキムチをつくったり、いろいろやっていますね。キムチだけではなくて、こういうことをやっていこうというのもありだと思えます。

○金武都市建設部参与（岐阜県各務原市） 確かに人参の産地でございまして、各務原キムチで売っています。当然人参が入ってございまして、韓国の春川市というところと姉妹提携をしていますので、その松の実を入れたものを各務原キムチとして認定をしております。その2つが入っていないと、キムチではあるけれども、各務原キムチにはならないということです。

ポテトチップスもキムチ味のものをつくってみたり、キムチに関することをいろいろやっています。津山市さんほどではないんですけども、B-1にも、キムチ鍋で参加してございまして、少しでも全国に名前を売ろうということを考えています。

○篠田コーディネーター ここまで大きいものは、まだのようです。

今の通年産業化ということで、御発表になっていない話の中で、こういうことも考えているということがありましたら、お話いただきたいと思いますが、どこかございせんか。

通年産業で、食とか農業にかかわらなくても結構なんですけれども、二瓶さんの先ほどの話の中にもありましたが、歴史的な建物を使って、これはまさに春夏秋冬を問わないわ

けですので、そういう点で、津山市さんが重伝建の指定を目指していらっしゃるって、ほぼ確実のようでございます。そういう点では、高山市は先輩中の先輩になるわけですが、伝統的な建物をうまく地域経済に生かしていくということについて、大変な知恵の集積があるかと思っておりますので、御披露いただけますでしょうか。

○西倉副市長（岐阜県高山市） ありがとうございます。

高山市の産業の基盤は、やはり観光でございますので、多くの観光客に来ていただいて、それも1回来たら、もういいではなくて、何度も来ていただく。そして、1回来ていただいたら、少しでも長く滞在をしていただいて、いっぱいお金を落とさせていただく。その2つが大事だと思っております。

とりわけ、今、先生がおっしゃった古い町並みということでございますが、先ほどちょっと申し上げましたように、春、秋の高山祭がございまして、春はちょうど桜の時期とも相まって、また、秋の高山祭は紅葉の時期と相まって、四季折々の季節の移ろいに合わせた祭事ですとか、催し物をやらせていただいております。その中で、古い町並みというのは、1年を通して、冬は雪が積もったり、また暑いときは打ち水をしたり、風鈴の音が鳴ったり、生活している方が、本当にそこで生活して見えるものですから、より一層、四季の移ろいを感じていただけたらと思っております。

そうした中では、高山市も城下町でございますが、本物をいつまでもしっかりと保存し、継承し、さらには伝えるだけではなくて、活用する。本物でないと、どうしても1回来たら、もういいとか、飽きられてしまうということがあるので、そのところはしっかりとこだわっていくべきだと思っております。

あわせて、その中で、新しい文化の創造ですとか、新しいお祭りをつくって、少しでも地域の中で晴れの日を見出していく。そうした取り組みもさせていただければ、ありがたいと思っております。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

桜と関係ないんですけども、古い町並みを生かして、今、注目されているところは、背中のほうの鳥取県に鹿野町という町があるんです。津和野町というのが、島根県の山口県寄りにありまして、小京都として大変有名なんです。亀井さんが殿様ですけども、その初代がつくった町が、鳥取の鹿野町なんです。かの司馬遼太郎、辛口というか、きちんとした評価をされる方ですけども、非常に気品のある町だということで、珍しく褒めています。

私も行ってまいりました。ここはお祭りを非常に大切にしているんです。だんだんお祭りが似合う町ではなくなってきた。下水道を整備しなければいかぬということで、古い建物を簡単に壊してしまうことがあって、これはおかしいのではないかと。伝統あるこのお祭りに似合う町を、私たちは守っていかなければいけないのではないかとということで、それが発端で本当にすてきな町になっています。町行く人に非常に気品があるということ、司馬遼太郎が言っているわけです。

今、高山市さんから話があったこととつながるわけですが、本物の生活をやっているということが、立ち振る舞いなどにあらわれていると思います。

昨日、津山市さんに出雲街道沿いの建物を案内していただきまして、大変風格があるというか、知性がきらめく町なので、重伝建の指定がなされれば、非常に魅力的な町になるのではないかと。

今、高齢社会です。元気なお年寄りも山ほどいて、また、そのお年寄りは金をたくさん持っている、そういう人は、古い町並みを歩きたがっていると思います。私もお金はないんですけども、その一員です。津山の通年観光がうまくいくように、ぜひとも重伝建の指定を獲得していただければと思っております。

もう一つ、桜祭りをやる。そこにたくさんお客さんが来るんだけれども、お客さんが中心市街地に導かれるようにはうまく行っていないので、桜を見たら、そのまま帰ってしまう。せっかくお金をもらえるチャンスなのに、それによって失ってしまうことが、悩みとしてよくあります。

かつて大村市さんでサミットをやったときも、そういう悩みを訴えられて、周遊性と言っておられたんですけども、その後、どうですか。

**○小野副市長（長崎県大村市）** やはりその傾向はあります。駐車場の問題などがなかなか解決しないので、問題は今も引きずっていると思います。イベントはできるだけ中心商店街で企画したり、桜ではなくて、町中居住ということと、にぎわい施設、公共施設を立地するような形で、現在、再開発事業をやっておりまして、それと連動するようにしています。

確かに県央という立地性から、たくさん呼び込める可能性がありまして、大村の場合は、駐車料金はただにしている状態ですので、イベントは成功するんですが、何とか周遊性を持たせるような工夫を考えていかないといけないと思います。これはまだ解決できておりません。

**○篠田コーディネーター** そうですか。

たしか五泉市さんからいただいた資料の中に、それについて一つのヒントになるものとして、スタンプラリーの話がありました。かなり多くの商店の皆さん方に参加いただいて、自然に中心市街地というか、商店街のほうに足が向くような仕掛けになっていると、私は読ませてもらったんですけども、より詳しくお話いただけますでしょうか。

**○伊藤市長（新潟県五泉市）** スタンプラリーですが、4月の花シリーズに合わせて行っております。今、水芭蕉が3万株満開です。来週の日曜日は、花が大きくなり過ぎますけれども、3万株の水芭蕉から始まりまして、今ほどのスクリーンの桜は、小山田の山桜があります。また村松公園の3,000本の桜ということで、今、咲き始めました。20日過ぎからは、チューリップが150万本一面に咲き出します。連休明けになりますと、120種の牡丹、5,000株が咲き誇ります。これを通して、五泉の花シリーズということですよ。

花を見て帰ってしまうということで、どう活性化させるべきかということで、スタンプ

を集めて、それに応募して、商品を景品としておあげするというので、昨年は5つのスタンプを集めるということでやりましたが、今年は3つです。イベント会場や観光施設と、町中の菓子店、そば屋さん、食堂さんのスタンプを最低一つの計3つということで、応募するには商店の中、市内の中に入らなければならないということでありまして、この結果を楽しみにしているところであります。

五泉市は里芋が大変おいしゅうございまして、推奨品でありまして、里芋を練り込んだ麺をつくりました。里芋麺ということで、焼きそば、ラーメン等をつくりまして、ホルモンうどんには負けませんが、一昨年、新発田市さんでB-1グランプリの県内大会がありました。初出場で、県内では4位をいただきました。食べてみていただきたいと思えますし、里芋も国の指定作物で、大変おいしゅうございまして。

スタンプラリーは、桜が散ってしまえば終わりでありまして、そういった花シリーズを通して、1カ月半ぐらいいは、お客を市内へ誘導するというので、その成果を、今、楽しみに待っているところでございます。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

会場の皆さんもおもしろい話だということで、関心を持って聞いていただいているのではないかと思います。14人の方々に、ぜひとも聞いてみたいということがございましたら、議論に加わっていただきたいと思うんですが、いらっしゃいませんか。知性あふれる津山市ですので、鋭い質問をぼんぼん言っていただいても結構です。

二瓶先生、ずっとお聞きいただいて、記念講演も踏まえながら、一応進めさせてもらったつもりなんですけれども、先生からアドバイスとか、あるいは御質問などがありましたら、せっかくですので、よろしくお願ひしたいと思えます。

○二瓶氏 私自身も大変勉強になって、メモをとらせていただいたんですけども、最後の視点3について、私なりのアイデアを申し上げたいと思えます。要するに桜祭りの会場と市街地との連動といいましようか、そういうものに大変苦勞していらっしゃるんだろうと思えます。桜祭りには来るけれども、すぐに帰ってしまうという形です。それは単体で存在するからだと思えます。どういう仕掛けをしていくか。市街地との仕掛けの方法を常に考えていったらいいと思えます。

一つは、今、おっしゃったようなスタンプラリーです。

もう一つは、私の知り合いのイベントの会社が仕掛けたんですけども、例えば桜祭りでもいいと思うんですが、会場の舞台の上で、ミステリーのお芝居をするんです。途中でやめてしまう。やめて、この解答は、町並みを散策するとわかってまいりますということで、そういう仕掛けを町並みの中につくり出して置く。そうしますと、最終的に桜祭りの会場に移ってきたときには、解答がおのずとわかる。しかも、あるお店に行ったときには、300円以上とか、500円以上の買い物を必ずするという仕掛けをつくって、会場との連動を図っていくということをやっているところがあるんです。そんなことも考えられるだろうと思えます。

昔、一店逸品運動ではないですけども、市内の商店から一点出してもらって、会場の中に展示する。いっぱい展示するんです。展示したものの売り値の総額は幾らですかというクイズを出すんです。その総額を当てるには、市街地のお店に行かなければ値段がわかりませんということで、そのお店に行って、値段を調べてくる。お店の中に入った人は、何も買わないわけにはいかないでしょうから、必ず何かを買って帰る。最終的には値段の合計がわかる。いついつこれは発表でございますので、何日間かかけていただければ、こういう豪華な賞品が当たりますということをやっているところがあるんです。つまり常に仕掛けをしていく。そういう意味では、先ほど桜をどうやってやるかと言ったのは、そういうことなんです。仕掛け人である必要があるだろうというのが、一つです。

もう一つ、全体的に私が感じたことは、桜のまちづくりについては、語り部が必要だと思いました。桜がいっぱいありますだけではなくて、先ほど物語、ストーリー性、歴史性という話が出てきましたが、語り部を養成していく。そうすると、桜のまちづくりに何らかの形でプラスになっていくのではないかと感じました。

○篠田コーディネーター 貴重なアドバイス、ありがとうございました。

ここで津山市長さんから発言がございます。

○宮地市長（岡山県津山市） 今、篠田先生の許可をいただきました。実は津山市議会の中に、観光議員連盟を立ち上げていただいております。久永議員さん、何かありましたら、感想でも述べていただければありがたいと思います。

○篠田コーディネーター 3分以内でお願いします。

○久永氏 1点だけお尋ねしたいと思うんですけども、先ほどコーディネーターの方からお話がありましたように、津山は7月には重伝建に設定されると思います。その後、約1.2キロの区域に空き家が50軒ございますので、その空き家を活用させていただいて、農業、ものづくり、食、お店、工房、そういうものをつくっていくということが、大きな課題になっていると思います。そういった点で、今日、見えている方で、そこら辺の苦労とか、秘訣とか、こうやったらうまくいったとか、そういうことがございましたら、お尋ねしたいと思います。

以上です。

○篠田コーディネーター ありがとうございました。

何かお答えございますか。

ちょっと時間がきておりますので、そのお答えは、別の形でもって伝わるようにしたいと思っておりますので、お許しをいただければと思います。

一応時間が来ました。

○高野区長（東京都豊島区） すみません。篠田さん、いいですか。

○篠田コーディネーター どうぞ。

○高野区長（東京都豊島区） 私も初めて参加をさせていただいて、感想を含めながら、発言させていただきます。

ソメイヨシノの発祥の地でありながら、桜に関しては、皆さんのいろいろなお話を聞いてみると、取り組みが遅れている、甘かったという思いがして、反省と同時に、これから皆さんと一緒に、さくらサミット全体の中で、どうやって盛り上げていくかということを経験的にやっていきたいと思いました。

ソメイヨシノというのは、先程来、樹齢が60年という形で、全国に散らばっているとありました。私が今日一番聞きたかったことは、それをどう保存していくかということです。病気になる、あるいは診断をする形の中で、こういったものに国の補助金は出ないんでしょうか。今は保存のためには、それぞれがそれぞれの対策をしています。日本の貴重な桜ですから、日本といえば桜という認識が強い中で、保存についてはもうちょっと国が力を入れてくれていいと思います。全国さくらサミットという形の中で、我々はもっと声を大にしてもいいという思いもしております。

また、今回こちらに来るにあたって、豊島区の桜はどうか、このような簡単なパンフレットをつくってまいりましたけれども、今日のお話を聞きながら、行政が表に出てはだめだということを感じました。また、先ほど二瓶先生からもいろいろ聞きましたけれども、**地域の方と行政との連携**というのは、絶対に必要なことではないかと感じています。それをいかに活かしていくか、地域のまちづくりの人たちが主役になって、その辺の流れをどう組み立てられているかということは、次の機会にでも皆さんからもお聞きしたいと思います。そんな思いをしております。どうぞよろしくお願いいたします。

○篠田コーディネーター ありがとうございます。

宿題もございましたので、その辺も検討させてもらいたいと思います。

総括をしなければなりません、ずっと聞いていただきまして、何を言おうとしているかということは、もうおわかりだと思いますので、あえて総括はいたしません。

ここで、日立さんから提案があります。3.11の東日本大震災に関連いたしまして、災害時相互支援について、御提案がありますので、説明をお願いいたします。

○小川副市長（茨城県日立市） 日立市でございます。

貴重なお時間を頂戴いたしまして、さくらサミット憲章第4条で規定されております、災害対策の相互連携協力につきまして、一歩進んだ形といたしまして、参加自治体による共同宣言あるいは同意が得られた自治体同士による協定締結など、憲章の具現化を御提案させていただきますと存じます。

東日本大震災では、私ども日立市でも、地震・津波によりまして、大きな被害を受けまして、電気、水道など、ライフラインが数日間途絶するとともに、飲料水や食糧までも不足する事態となりましたけれども、災害時の応援協定を締結した自治体からは、混乱の最中、即座に厚い御支援をいただきまして、広域的な相互応援協定の重要性及び必要性を再認識いたしましたところでございます。

また、昨年来、国の防災計画改定等におきましても、東日本大震災の教訓を踏まえまして、新たな大震災や原子力災害など、大きな被害が予想される災害に対しまして、各自治

体が広域的に連携をし、助け合うことが重要な取り組みとされております。それはもとより、国内どこでも被災地となり得るということでもあろうと思っております。

昨年は、日立市も入っております、全国鶴飼サミットでの共同宣言及び関係自治体による応援協定締結などをさせていただきました。このようなことから、日本を代表する花、桜を通じまして、25年という長きにわたり、交流を続けてまいりました、さくらサミットに参加する自治体間の強いきずなをもとにしまして、共同宣言あるいは協定締結による災害時の相互支援の具現化につきまして、できれば、今後の検討課題として取り上げていただけないか、御提案をするものでございます。

本日、御臨席の皆様におかれましては、ぜひこの取り組みの趣旨を御理解いただきまして、前向きな御検討をお願い申し上げるものでございます。

日立市からは以上でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。貴重な時間、ありがとうございました。

○篠田コーディネーター ありがとうございました。

今、提案がございましたけれども、ここで拍手をいただければと思います。

○篠田コーディネーター そういうことで、今の御提案は、大会の共同宣言の中に盛り込むという形で進められているようでありますので、今の日立さんの御意見を踏まえて、宣言をしていただければ幸いかと思います。

以上で私の責任は終わりました。ありがとうございました。



## ■ 大会共同宣言

岡山県津山市 市長  
**宮地 昭範**

私から第21回「全国さくらサミットin津山」共同宣言を発表させていただきたいと思えます。

第21回「全国さくらサミット」は、全国14加盟自治体の出席のもと、ここ岡山県津山市で開催されました。

本会議では、「新たな桜の観光まちづくり～地域資源を活用した観光振興～」をテーマに、桜を活かした観光まちづくりについて情報交換をするとともに、それぞれのまちの地域資源に着目し、桜との併用による新たな観光施策のアイデアについて意見交換を行いました。

一時的・通過型観光からの発展、既存の桜の保護といった課題解決はもちろん、いかにわが町の特色を活かした観光施策を打ち出していくかが、今後の桜のまちづくりには必要であります。私たちは、全国にわがまちの桜の魅力を発信し続けるとともに、オリジナリティのある桜の観光まちづくりを目指し、加盟自治体間で知恵と情報を共有し、さらなる魅力あるまちづくりに努めることを宣言します。

また、2年前の東日本大震災では、本サミットの加盟自治体も大きな被害を受け、いまでも困難を強いられている仲間たちがいます。純潔、清き心という桜の精神に則り、加盟自治体間において防災をはじめ多方面で支え合い、桜で結ばれた絆を深めていくことを誓います。

平成25年4月8日、第21回「全国さくらサミットin津山」開催地代表、岡山県津山市市長宮地昭範。

北海道新ひだか町、秋田県仙北市、茨城県日立市、東京都豊島区、東京都北区、新潟県五泉市、新潟県新発田市、岐阜県高山市、岐阜県各務原市、岐阜県本巣市、奈良県吉野町、島根県雲南市、長崎県大村市。

以上でございます。



## ■ 次期開催地代表挨拶

新潟県五泉市 市長

**伊藤 勝美**

大変ありがとうございました。

21回のさくらサミットが津山市、宮地市長さんのもと、このように盛大に開催され、昨日の事前会議におきまして、五泉市を承認いただきました。この場を借りまして、厚く御礼申し上げる次第であります。ありがとうございました。

先ほどもありましたように、桜は日本全国にあり、日本人の心を育てる。それと同時に、子供からお年寄りまで親しむ木、親しむ花です。申すまでもありませんが、このように、私ども五泉市は昨年各務原市で行われました第20回さくらサミットに初めて参加させていただきまして、感動して帰ったところとであります。

このたび22回目の全国さくらサミットを五泉市で開催するに当たりまして、津山市さんのような立派なサミットが開催できますか、心配であります。十分に準備をさせていただきまして、全国から大勢の皆様にご参加いただきますよう、心よりお願い申し上げますとともに、第21回全国さくらサミットに関しまして、津山市のさらなる御発展、宮地市長様のさらなる御活躍、また、今回参加されました各市区町村のさらなる御発展、会場におられます皆様方の健康、御多幸を御祈念申し上げまして、来年お待ちしておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございました。

